

論
説

ドラマツルギーの世界の構造

——『共在』の秩序と技法

小野坂

弘

一 ドラマツルギーの世界の構造

(一) ドラマツルギーの視点

(二) ドラマツルギーの構造と制作過程

A ドラマの共時的・通時的構造

(1) ドラマツルギーの諸概念

(2) ドラマのタイプとドラマ的状况

(3) 観客

B ドラマの制作過程

- (1) 上演可能なアイデア
- (2) 上演
- (3) 役者・行為者と役割

二 ドラマツルギの技法

- (一) 社会的相互行為秩序の前提と仕組み
 - (二) 相互行為（表出行為）と相互行為秩序
 - (三) 儀礼秩序としての相互行為秩序
- 三 \wedge 市民的自己 \vee の極限——「精神障害」と「アサイラム」
- (一) 無礼・不躉・不作法と「精神病的徴候」
 - (二) 精神障害者の隔離過程
 - (三) 「アサイラム」—— \wedge 市民的自己 \vee の剝奪装置

本稿でアーヴィング・ゴフマンによって提唱された \wedge ドラマツルギー (dramaturgy) \vee の世界の構造を素描してみたい。それはこれまで論じて来た \wedge 物語の構造 \vee とは違った、『共在 (co-presence)』の秩序と技法の世界である。⁽¹⁾

一 ドラマツルギーの世界の構造

(一) ドラマツルギーの視点

第一に、 \wedge ドラマツルギー \vee の世界の秩序構造について考察しよう。 \wedge ドラマツルギーの視点 \vee とはいかなるものか。ゴフマンが \wedge ドラマツルギー \vee を結局は比喩として考えていたことは確かであるので、ここでは社会心理学の立場で \wedge ドラマツルギーの視点 \vee を擁護するデニス・プリセットとチャールズ・エッジリーの考えに基づいて要約する。⁽²⁾

(i) ドラマツルギーの原則 プリセットとエッジリーは言う。「ドラマツルギーのもつとも直截な定義は、それが人間が自分達の暮らしの中でどのようにして意味を実現するかの研究であるということである」。「ドラマツルギー的な意味での意味とは、人間の間の行動的な合意から生ずる。それは少なくとも二人の人が、同一あるいは類似したやり方で、自分達の環境にある人と物に対して振る舞うことの結果であり（先例ではない）。意味は二つの基本的な要素を持っている。一方では、それは人間の活動の行動的な結果（人々がやったことの結果）である。他方、それは『社会的行為 (social act)』と呼ばれているものを定義する特徴である」。「何らかの社会的行為において、ある有機体の別の有機体のジェスチュアに対する反応が、そのジェスチュアの意味である」(Mead)。

プリセットとエッジリーはここで、ドラマツルギーの世界観はステファン・ペツパーの言う「文脈主義」あるいは

はプラグマティズムのそれであるとして、根本的な比喩は歴史的出来事であるとするサーピンを引用する。まさにここで物語論とドラマツルギーは収斂する。「むしろ、意味は人間の相互行為の常に問題的な達成なのであり、変化、新奇性と両義性に悩まされている」。「意味の発生は、全く試案的で不確定な現象なのである」。「ドラマツルギーの基本的原則とは、人々の行うことの意味は彼らが同様に表出的 (expressive) な他者との相互行為において、自分を表出するやり方に見い出されるべきだということである」。換言すれば、「表現的活動であると共に変換的活動でもあるレトリックを通じて、人間は自分達の内在的な象徴能力を行使し、共通の経験に形を与え、そして社会的交渉の秩序を維持するのである」(Voskerician)。「しかし、意味が発生するのは、同様に表出的で能力を与えられた他者との相互行為においてのみであるから、ここに意味の達成の壊れやすさと不確かさがあるのである」。「ドラマツルギーの焦点は、相互行為者が何を考え、感じ、あるいは経験しているかにはなく、むしろ人間の相互行為のコミュニケーション的次元にあるのである」。「行為主体の表出性は……二つの根本的に違った種類の記号活動を含んでいるように思われる。すなわち、彼が意図的にする (give) 表出と彼が何気なくする (give off) 表出である。第一のものは、彼と他者がそれらの象徴に付与していると分かっている情報を伝達するためにのみ、分かっているながら使用する言語的象徴あるいはその代替物を含んでいる。これは伝統的で狭義の意味でのコミュニケーションである。第二のものは、その行為がこのようなやり方で伝達される情報以外の理由で遂行されることを期待して、他者が行為者の徴候であるとして扱うことのできる、広い範囲の行為を含む」⁽⁴⁾。両義性は「言葉によらない」……様式が (社会生活におけるもつとも感受性の強い領域である) 表出的意味の適切な論証のために必要であると共に、容易に否認されるという事実にある」(Levine) (以上一—五頁)。

(ii) ドラマツルギーの意識　プリセットとエッジリイはツィクリンを引用する。「第一に、個人がどのように他者に見られているかを気にしない相互行為がある。……第二に、単に自分が一般にやることをやっていることによつて、あるいは自分が一般にそうであるやり方であることによつて、ある印象を意図しないで生み出す個人をわれわれは持つている。……第三に、自分が自分自身を含む世界をどのように経験しているかを他者に伝えたかと思ひ、世界における自分固有のユニークで全体的な存在の率直な実感を与えたいと思う個人をわれわれは発見する。……この様式では、その人は、他者が自分自身を経験するやり方を、他者が考え、表現し、そして行為において露にするように、把握しようと思つてゐるのである。……最後に、人は自分が強調しようとして選択した自我の属性・特徴を他者が認識するように、意識的な試みが行われるという、そのような他者に対する方向づけに出会うかもしれない」と。ドラマツルギーにおいては「人々の行いが、その人々の意味と存在を確立する」のであつて、一般的な誤解に反して、ドラマツルギーの意識は行為の意味に関して決定的ではない」（五一—六頁）。

(iii) 両者の関係　確かに、たとえば、政治家の選挙運動に見られるような、印象の意識的な操作はあるし、それは今後注目すべき事例であらう。しかし、基本的なことは意味の制作であつて、意味の捏造ではない。そもそも意識的な操作がうまく行くとは限らない。「外見は現実によつては決して破壊され得ないのであつて、ただ別のセツトの外見によつてしか破壊され得ない。この意味で、『物事は、それが一見そうであるように見えるものではない』という成句は、ある人の聴衆に物事を別のやり方で見えるように説得するための、個人間の戦略と見なされよう」。しかし、このような意識が行爲する個人にとつて全く重要でないと言ふことも行き過ぎである。「精神分析的、機械論的、あるいは如何なるその他の立場と同様に）ドラマツルギーの実感は、相互行為が不首尾に終わつてしまつ

た、そのような状況においてもっとも普通に起こる——それ故に、ドラマツルギストの重大関心事は、困惑、失策、お詫び、弁明などの問題である。何故なら、われわれが自我、目的、そして人生に対するわれわれの態度を意識するようにするのは、このように、われわれの進行中の行動が中断される場合という文脈、あるいはわれわれが他者の行動を中断する場合という文脈においてであるから。「結局、人間を悩ませる関心事を知りもしないし、気にもしない宇宙から出て、われわれ自身とわれわれが関係する他者の双方に対して虚構の自我を作る負担をも負うのは、われわれ自身について考えること（ミードの言う『私(I)』と『私(Me)』の対話）ができる者の特権に過ぎないのだろう」と（六一―九頁）。

(iv) 社会心理学の基本問題とドラマツルギー的解決 「如何にして社会は可能なのか」、あるいは自我・個人と社会の緊張関係。ドラマツルギー的視点は、この厄介な「あちらか、こちらか」(either/or)を「両方とも」(both/and)へと変換する。ドラマツルギーの言葉は関係的である。「……ドラマツルギーが、われわれ/彼ら、私/われわれ、内部/外部、そして人間的な事柄の分析を苦しめる、その他の極端の二元主義の全てを調停するのは、状況づけられ、場面に特殊な行動の分析によってなのである。……さらに、ドラマツルギストの主要関心事は、人間の状況の単に形式的な要素だけではなく、過程的で、移り変わる要素でもある。タイミング、テンポ、リズム、そして休みのような事柄は、誰が、何を、何処で、何時、そしてどのようにというより形式的な特性に焦点を合わせるパークの五基語と同様に、社会的出会いの意味にとって重要であると思われる」。ドラマツルギーは相互行為のアンビヴァレンス、両義性、困惑を強調し過ぎるのではなく、それらに適切な意味を与えているのである。

「人々が住んでいる世界はコミュニケーション的で、全く状況的であるから、忘れてはならないことは、われわれ

れが何かを行っている時には、われわれは常にまた別の何かをも行っていることである。このようにして、ドラマツルギストが個人について、彼らの行動の主体であると共に客体として、表出する人物であると共に自我として、役割を制作すると共に役割を演ずる者として、構造的な規則性を確認すると共に創発的な可能性を構成する者として、語る時には、それは人間の生活・人生の統一性を確認しているに過ぎないのである」。

「普遍的な人間的性質とは、正しく人間の事柄ではない。普遍的な人間的性質を獲得することによって、人は内部的な精神的な特性からではなく、人に外から押し付けられた道徳規則から作られた一種の構成物となる。これらの規則は、従われる場合には、人が自分自身と出会の仲間の参加者について行うであろう評価、その人の感情、彼が特定の義務的な種類の儀礼的均衡を維持するために用いるであろう実践の種類を決定する。……特定の人や集団や社会が全て固有のユニークな性格を持っていると思えると思えば、それは人間的性質の諸要素の標準的なセットが特定の仕方では整えられ、結びつけられているからである」⁽⁶⁾と（以上一〇—一四頁）。

(二) ドラマツルギー的構造と制作過程

ドラマツルギーを考える時に、あるドラマの共時的かつ通時的な、断面構造を考察する方向と、いわば通時的なドラマの制作過程を検討する方向がある。結局は両方向を考察しなければならないが、考察の都合上、まず第一の方向、ドラマの共時的・通時的な構造を検討する。⁽⁷⁾

A ドラマの共時的・通時的構造

(1) ドラキッルギーの諸概念

「社会的相互行為の一つの事例は、パフォーマンス (Performance) である。どんなパフォーマンスも、劇場のそれを含めて、ある状況についてのアイデア (idea) と、その状況の中で展開される行動から出発する。そのアイデアとは、その中にパックされた行動プログラムを持つ単一のイメージかもしれないし、丁度、夢の中の象徴のように、目が覚めている時の出来事の混合かもしれない。他方、そのアイデアは、配役の各メンバーの役割とそのパフォーマンスを導く舞台での指示を伴った、劇のための詳細な台本 (script) として完全に展開されるかもしれない。単一のアイデアは非公式の小集団における、一時的な相互行為を導く傾向があるが、一方、台本は工場のような公式の組織——ここでは作業場所での行動が高度に構造化されている——における相互行為を導く。また中間的な複雑さを持つアイデア、行動している群衆における基本的な集団行動の事例を導く (動きの指示と演じられるべき役割の最低限のセットの双方を含む) テーマ (theme) や、社会運動における活動を導く (詳細な台本、定義された役割と集団が目標に到達するために通過しなければならない諸段階の指示を伴う) 筋 (plot) のようなものもある」。「一度アイデアが推進されると、行動領域 (action area) が必要である。このことは行動領域の構築あるいは発見と、あるとすれば観客 (audience) のための規定を作ることとを伴うだろう」。「パフォーマンスの次の段階は、自分達の役割 (roles) を学習しなければならない役者 (actors) の募集を伴う。これには一つ、あるいはそれ以上のテーマの実現 (enactment) が続き、そして最後には、最後のカーテン・コールの後で、役者と観客の双方にとつての、状況の定義に対する行動の効果の評価の時間が続くのである」と (三一四頁)。

「これまでドラマツルギー的分析に対して提示されて来た基本的概念の幾つか並びに付け加えられる概念の幾つかの要約が、図1に描かれている。大きな方形は行動領域を表す。これは二つの部分、すなわち、舞台裏 (backstage) と舞台 (stage) に分けることができる。舞台裏は役者が自分達の役割のために準備する所であり、特別の効果「たとえば、雨の音」が観客に影響を与えるために作り出される所である。ここは場面を整え、小道具、衣装とメイク・アップを用意する人々が自分達の仕事をを行う所である (舞台裏スタッフ (backstage staff))。舞台は観客の全くの面前で、行動が行われる所であ

意味
(状況の定義、フレーム、幻想)

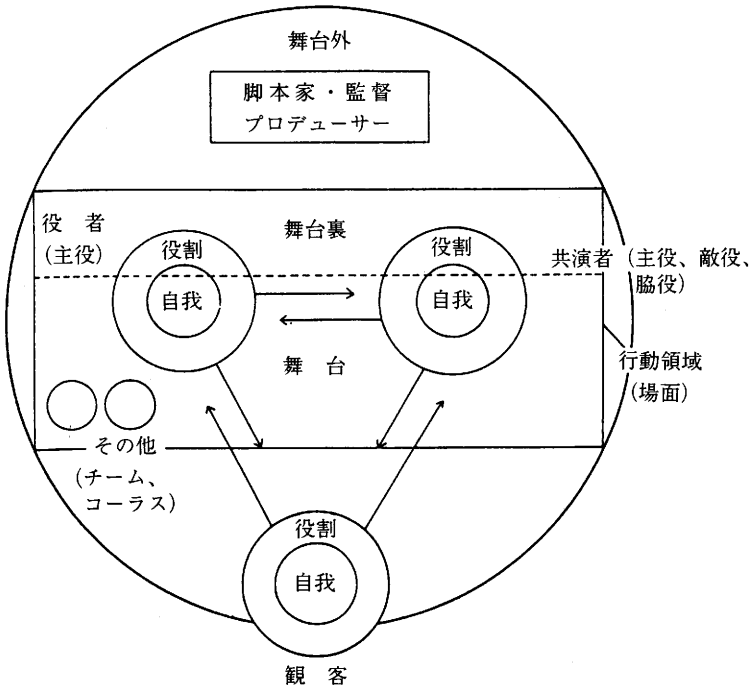


図1 ドラマツルギーの諸概念

る。どんな行動のためにも、また舞台裏・舞台の袖・楽屋・舞台外 (offstage) があり、そこは活動を組織して来た人 (プロデューサー (Producer)) と、配役にリハーサルをして来て、行動への合図を用意する人 (監督 (director)) が観客から隠されたままである所である。加えて、パフォーマンスのための最初のアイデアまたは台本を用意した人 (劇作家・脚本家 (playwright)) が居るであろう。このリストは完全ではなく、特定の状況に応じて拡張されよう。「舞台においては、図1において、二組の同心円がある。一つはその時点のテーマの担い手である主役の役者によって演じられる役割を表している (主役 (protagonist))。一つは (別のアイデアの主役、第一のアイデアの敵役 (antagonist))、あるいは主役を支援する脇役 (auxiliary player) である若干の共演者を表している。役割 (roles) を表す大きな円のそれぞれの内部に、自我 (self)、それぞれの人が役割に持ち込む個人的な特徴を表す小さい円がある。主役の近くの小さい円は、主役を支援してチーム (team) を形成する付加的な役者たちを表す。このタイプのチーム・ワークの一つの版は、ギリシャの悲劇におけるコーラスの活動に見いだされるが、これは主役の気分を強調するのである。別の例は国際的な集まりで話し手のために言語の翻訳を用意する人であろう。舞台の前面にある同心円の一セットは、観客メンバーを表す。外部的な観客がいない場合にさえ、役者が自身、自分と他者の行動に対する観客である。他の役者や観客メンバーが身体的に存在しない場合にさえ、全ての社会的行動は、一人あるいはそれ以上の準拠集団の期待についての若干のアイデアを心に、履行される」と(六一―八頁)。

(2) ドラマのタイプとドラマ的状况

(i) ドラマの四タイプ アリストテレスは悲劇、喜劇、叙事詩というジャンルしか認めなかったが、悲劇 (tragedy)、喜劇 (comedy)、メロドラマ (melodrama)、ファルス (farce) の四タイプのドラマは広く認められて

いる。古くはクレイトン・ハミルトン、下ってバーナード・ソーベル、エリック・ベントレー、ロバート・ステイ
 ピンスが種々の論点を提出している。⁽⁹⁾二〇世紀においてはこれらの四タイプ區別は明瞭ではなくなつて来て
 いる。⁽¹⁰⁾しかし、「帰属理論 (attribution theory)」⁽¹¹⁾を考慮して、ドラマの四タイプは次のように類型化される。「①
 悲劇は、誰か一人の人、あるいは複数の人々に帰せられる、悪い結果を持つ。②喜劇は、同様に一人の人、ある
 は複数の人々に帰せられる、良い結果を持つ。③メロドラマは役者・行為者自身が置かれてある状況に帰せられ
 る、悪い結果を持つ。④ファルス「道化芝居」は、状況に支配された、良い結果を持つ。「日常生活においては、
 恐らく、たとえば、一人、あるいはそれ以上の人々が、公共の場所にいる通行人を狙撃する殺し屋の性格の『決定
 的な欠陥』の故に殺される場合のように、悲劇的な性質の出来事特定することがもつとも容易である。世界の多
 くの部分で起こっている、抗議者と警察の間の民族間紛争などは、よりメロドラマ的な性質である。何故なら、参
 加者はパーソナリティの違いにほとんど注意するまでもなく、社会的役割を演じているからである。困惑させられ
 る状況に置かれているか、あるいは悪ふざけの標的にされている人はファルスのな出来事の役者となる。最後に、
 人々が自分達の問題に十分な距離を獲得できて、それらの問題を歌、漫画、マイム、あるいは自在に流れるような
 対話の中で笑いものにする事ができるようになる機会は、喜劇の本質を用意するのである」と（一六一—一七頁）。

(ii) ドラマ的狀況 ドラマ的狀況のもつとも包括的な分析の一つは、ジョルジュ・ポルティ (Georges Polti) の
 『36のドラマ的狀況』⁽¹²⁾である。ポルティ以前に、ある劇評家が基本的なドラキ的狀況は三六しかないと主張してい
 た。ポルティは約一、〇〇〇の舞台劇と二〇〇のその他の物語を分析してこの説に挑戦したのだが、結論として、
 三六のドラマ的狀況しか存在しないと。ここでは列挙しないが、それらのドラマ的狀況は別の論文で前述した

プロップの機能¹⁾を想起させるものである。したがって、ポルティが大抵のドラマは幾つかのドラマ的状況の組合せであると言うのは、当然である。「何か他のものと結びつけられないような状況はない。その結果、それらの状況は論理的に展開され、あるいはディレンマを呈し、あるいはそれぞれが特定の集団や役割に関係する」。ポルティは図1とそれについての説明とほとんど同じことを言っている。全ての状況に共通することは、どのドラマ的状況も二つの主要な努力の方向の間の葛藤から生ずるということである。一方は主役であり、他方は敵役である。「筋」を生む、物、事態、あるいは第三者の導入によって不均衡が生じる。若干の脇役があるいは主役を、あるいは敵役を支援する。それら脇役とは、コーラス、親友、群衆、道化役、「端役」などである。同じ人が多くの役を演じたり、同じ役が多くの人々によって演じられたりすると。

ポルティの分析は上に述べたように、極めて基本的なものであるから、その後、一〇〇年以上の理論的進展にも耐えたのである。一八六八年のフランス語での原著出版、一九二二年の英訳、一九七七年の英訳の再版がこのことを物語る。この点でもロシア・フォルマリストの古典、プロップの『昔話の形態学』を想起させる。ポール・ヘアは三六の基本的状況は七セットのドラマ的状況にまとめることができる¹³⁾と言う。幾つかの役割の相互作用に焦点が置かれる社会システム・レベルが四つと、自我の違った部分間の葛藤に関する個人・パーソナリティ・レベルが三つ、である。以下に簡単に述べる。(a)社会システム・レベル ①ヒーロー 対 悪役。主役としてのヒーロー(上昇、肯定的、そして真剣)、敵役としての悪役(上昇、否定的、真剣)、そして第三の役あるいは物。順応あるいは反順応は主要な論点ではない。②征服された者と勝者。強調点は、主役(下降)と敵役(上昇)の相対的な力に置かれる。③愛／憎しみの三角関係。強調点は、社会的相互行為の肯定的―否定的次元に置かれる。相互に好き合うべき

人々が、そうではない状態にある。このタイプの状況は、一般に三角関係におかれる好みの不釣り合いに関わる。

④罪と罰。強調点は、順応と反順応に置かれる。犯される罪はどんなタイプのものでもよい。しかしながら、家族のメンバーが愛する者が通常は関わっており、そして反順応的行動はしばしば、あるいは不倫、または近親姦姦である。(b)個人またはパーソナリティ・レベル ①決定的な欠陥。上昇的、肯定的、理想的自我が、主役の上昇的、否定的行動と対照させられる。このことは、争いが同一人物の二つの局面の間にあることを除けば、社会システム・レベルの①と同様である。②探求。テーマは、比較的無力な主役が、障害を克服しながら、誰か、あるいは何かを探求するという、上昇的―下降的次元を強調する。③自己犠牲。テーマは、理想的な自我への順応と何らかのプラグマチックな行動の間の葛藤である。

(iii) エピソード——段階・幕・場 ドラマは分析のもっとも大きな単位であるが、ハッレとセカンドは単一のドラマを「エピソード (episode)」と呼ぶ。エピソードは社会活動の自然の単位であり、社会生活の自然の区分である。三つのエピソードのタイプがある。①公式のエピソード。たとえば、儀式やゲームがそうであり、何が、何時、誰によってなされるべきかについての規則がある。「本当の―模倣の、儀式的―くつろいだ、協力的―競争的」の三つの対にしたがって、八つのタイプに分類されている。②たとえば、車を修理する場合のようなルーティーン・エピソード。行為は自然の出来事の連続に従う。③エンターテイメント・エピソード。遂行された行為からの結果は存在しない。ハッレとセカンドはドラマツルギー的視点からの社会行動の分析について、人々が役者あるいは観客として従事しているエピソードをドラマのパフォーマンスとして扱うこと、儀式・ゲーム、ルーティーン、エンターテイメントが模写される劇の台本があるかのように、役割―ルール・モデルの図式で分析できる、

台本、舞台の指示などを再構成することを薦める。⁽¹⁴⁾

われわれの分析にとつて重要なことは、後でこの点は詳しく検討するが、上演可能なアイデア、行動領域の選択、役者の選択、役のリハーサル、アイデアの実行、状況の新しい定義（あるいは従前の定義の強化）という「段階 (phases)」に沿ってドラマの生産が行われることである。どのような話がドラマとして構成される場合にも、一つの段階の中には、一つ、二つ、あるいはそれ以上の「幕・段 (acts)」があり、それぞれの幕・段の中にさらに小さな「場・場面 (scenes)」がある。ファン・ラーンは演劇における場の特徴を要約して言う。「①それ固有の始まり、中間、そして終わりを持つ、何らかの語りの単位。②行動の全体にわたるパターンにおいて、小事件の組み込まれた連続として現れる。③限界設定は、場所の変更あるいは舞台の一時的な清算である。④ギリシャ悲劇においては、歌唱詩またはコーラスが場を分ける。⑤焦点の移動がある」と。

幕・段と場・場面の移動・区別は行動領域や役者の変更が伴うが、より大きな単位である幕・段の方が場所や時間や役者の変化が大きく、明らかである。劇場では通常は、幕が閉まることで示される。実生活においては、たとえば、場所が客間での食前のお喋りから、食堂での食事、食後の客間あるいは別の部屋でのアフター・ディナーのお酒と移動すること。一週間の一度の会合の場合には、それぞれの会合が幕に当たり、一回の会合の最中のメンバーの出入り、話題の変更などが場に当たるとであろう。ヘアとブランバークは、ドラマの上演段階については幕と場という用語を使い、上演前の段階と上演後の段階についてだけ「段階」という言葉を使うことを提案している。⁽¹⁵⁾ (二二頁)。

ヘアは南アフリカにおける集団抗議行動の分析で、「自然の単位」として、①計画②最初の行動③警察・当局の到

着とデモ参加者の反作用④警察の行動とデモ参加者の反応の相互作用⑤解散と逮捕⑥掃討と捜査⑦裁判⑧私的な、あるいは公的な報告の八つの段階を区別している。¹⁷この自然の段階の区別は、分析にとって極めて有効であろう。また「時間の線 (time line)」に沿って人々の活動を描写・分析することも場合によっては、事態のより良い理解をもたらずであろう。たとえば、英国のサッカー・ファンの活動をホーム・ゲームと遠征ゲームで比較したものである。両チームのファンにとって、支度、集合、リハーサルという試合前の段階があり、試合段階は試合の丁度前で始まり、ホー・チームのファンが相手チームのファンを見送る時まで続く。最後の段階は、何時ものような土曜日の夜の活動に戻ることで終わる。二つのタイプの試合で、明らかに活動形態、特に試合前と試合後のそれらが違っていることは明らかである。¹⁸

最後に、ネルソン・フートの研究を取り上げる。¹⁹フートは言う。人間の発達の研究に相応しい唯一の語彙は、生物学や精神分析やピアジェのそれではなく、ケネス・バークの劇学のそれである。「どのように発達が行われるか」という問題はそこで、本質的には、どのようにして一つのエピソードが別のエピソードを条件づけるかの考察を必要とするものとして、解釈されるのである」。フートは四つの特徴を指摘する。第一に、人間行動のエピソード組織は実生活の特徴なのである。実生活においては、それぞれのエピソードは他のエピソードの間に埋め込まれている。それぞれの行為者の人生における一連の連続的エピソードは、他の行為者の一連のエピソードと相交わるが、しかしそれらとは必ず違っているのである。相互行為の中である人々を結びつける一連のエピソードは、たとえば、戦争の時の家族の離散の例におけるように、集団全体を巻き込む包含的エピソードの要因部分を形成する。第二に、人間行動には隙間がないこと、あるエピソードが終わると、別のエピソードが始まることである。ルー

ティーン——文化的特徴、ルール、形式、習慣、習俗——がエピソードの中に要素として、埋め込まれている。人々は発達するにつれて、ルーティーンを選択肢、経験を通じて蓄積され、おなじみの役割に緩く束ねられているレパトリイに近づくことができるようになる。これら諸要素の結びつき方は決まっているわけではないが、これらの既知の条件は場面を設定し、ある問題を扱う資源や手段を用意する。問題の定義がその後のエピソードの構造を決定する傾向があるが、状況を定義することさえも、それ自体構成の行為なのであり、たとえば、後の段階の見通しが前の段階の構成に影響する。第三に、相互行為のエピソードには全て、一度始まったら、完成させねばならないという暗黙の、しかし普通は確かに感じられる強制が存在している（「終わらない仕事 (Unfinished business)」）。それぞれの行為者が他者に、終わるまでエピソードに付き合うように強制したり、関与・同一視・義務・規律、現実の、または想像上の観客による結果の評価の期待が次々に起こる。第四に、エピソードの物語的特質である。

フートは最後に、人間の発達が相互行為のエピソードの結果の累積的な産物であることを強調して、Havighurst を引用する（「発達の仕事 (developmental tasks)」）。人々の人生史、特に初期に、多くの挑戦的な問題が時期的順序で提起され、それらを一つ一つ解決することが次に繋がると。悪循環の例としてパラノイアを、良循環の例として良い養育環境にある子供をあげて説明している。

(3) 観 客

(i) 「劇場に行く人 (theatergoer)」と「観劇するひと (onlooker)」 舞台の上で役柄を演ずる個人は、少なくとも「舞台俳優」と「登場人物」の二つの自己を表しているが、「観客」はどうか。ゴフマンは二つの立場を区別する。⁽²⁰⁾「一つは劇場に行く人の役割である。この人は予約をし、チケットを支払い、時間に遅れて、あるいは時間

どおりに「劇場に」来て、パフォーマンスの後でカーテン・コールに答える人である。「この人は担うべき劇場外の活動を持つている。この人が使わねばならないのは本当のお金であり、この人が費やし切る時間は本当の時間である——それは丁度、パフォーマーが本当のお金を稼ぎ、それぞれのパフォーマンスを通じて自分の名声を付け加え、あるいは減ずるのと同じである」。「劇場に行く人は、舞台の俳優の対応物なのである」。

「劇場に行く人であるそれぞれの人は、何か別のものでもある。この人は舞台上の非現実的に協同する。この人は台本上の登場人物のドラマ的な相互作用によって作り出された非現実の世界に共感を持って、その身になって参加する。この人は自分自身を引き渡す」。「ここで、観劇する人（鑑賞する人）という用語を——この用語が舞台外の、現実の活動への短く、公開であるが、裁可されていない、その身になっての参加をカヴァーすることがあり、しかもその「用語例の」方が良いということを心に留めて——話すことができよう。重要なことは、観客の活動の観劇という局面は舞台にかけられた行動のように、現実の事柄の舞台にかけられた、あるいは模写されたレプリカたるものではないということを理解することである。鑑賞することの舞台外版は、劇場性のモデルではない。もし何かあるとすれば、その逆が本当である。観劇することは、初めから、劇場フレイムに属する」。

ゴフマンは二つの種類の「笑う人 (laughter)」の例によって、この二つの立場をうまく説明する。舞台の登場人物の一寸したおどけに対して共感を持って反応する観客のメンバーは、観劇する人として笑っているのであり、何か台本にはない仕方度筋を間違ひ、やり損ない、あるいは台なしにする役者を目指して笑う人は劇場に行く人として笑っているのである。舞台上の役者はどちらの笑いも聞かなかつたかのように進めるが、パフォーマーに対する効果は異なる。共感的な笑いは、役者にそのような反応に应答する暇を与えるのに対して、失敗を笑うことはそ

の幕・場をできるだけ早く終わらせるように促す、と。

(ii) 観客としての他者と自己と準拠集団 バーンズが言うように、日常生活のパフォーマンスの過程においては、観客はいつも居るわけではない。たとえば、ディナー・パーティでお客が小話を語る人の観客を務めるとか、群衆が街頭の喧嘩や警察の追跡の見物の役割を果たすように、その行動に関わっている他の人や、参加していない個人が、観客として行動する役割に巧みに誘導されることがある。また、たとえば、両親が友達や見知らぬ人々の前で、喧嘩したり、子供を叱ったりすることを避けようとするように、自分達のとって有利ではない場面で観客であることを避けるために、格別に努力するのは普通のことである。⁽²¹⁾

G・H・ミードは自我の中に住む別のタイプの観客を同定した。すなわち、自我の構成部分としての「私なるもの (the "I")」と「別の」私なるもの (the "Me")」である。ミードは別の私を、私なるものの行動を観察・激励・抑制する、内なる観客として描いた。これは換言すれば、良心あるいは内部批判の在り方である。ゴフマンが言うように、「パフォーマンスとしての資格の個人は、自分がそのパフォーマンスについて学ばねばならなかった信頼されない事実を、自分の観客としての資格の自身から隠すことが必要となるかもしれない。日常生活の用語で言うならば、その人が知っており、あるいは今までに知った事柄で、自分自身に語ることでできないことがあるであろう」。このことについては、精神分析が多くの例を提供している。「恐らくここに、われわれは『自己—距離化 (self-distanciation)』と呼ばれて来たもの、すなわち、人が自分自身から疎遠にされていると感じる過程の一つの源泉を、持つのである」⁽²²⁾と。

役割の実行が行為者の心の中にだけ存在する観客に向けられている時に、この特別の種類の観客を「準拠集団

(reference groups)」と呼ぶ。準拠集団は一人の他者でもいいし、一つの集団でもいいし、あるカテゴリーの人々でもよい。実在していなくてもよい。ミードは、ある集団や社会の規範を表象し、したがってある人の行動を指示・統制するのに特に重要な観客を認識上表す用語として「一般化された他者 (generalized other)」を使用する。⁽²³⁾

(iii) 観客の機能 物語派心理学のテオドール・サーピンは観客の四つの機能を次のように要約する。⁽²⁴⁾ ①合意に基づく現実。ある役割の実行を適切であるとして受け入れることによって、観客はその実行の確認を留意する。その役割の実行の間そこに居ることと、パフォーマーによって解釈された役割をそのまま受け入れることによって、観客者は公にその役割の現実性を確認し、そのようにして社会的現実を制作する。たとえば、医学部の学生は、医学科スタッフのメンバーである観客の前で遂行する時に、医者の役割を確認される。②キューを出すこと。キュー (cue) とは、パフォーマーの役割実行を導く観客からの識別力のある反応である。たとえば、不審そうな表現は、役割行動が曖昧であるということである。観客からのキューが役割実行のペースや強度を統制し得る。観客は最も望ましい、あるいは効果的な行動過程に関して、行為者に「合図を送る」こともできる。③社会的な強化。観客は役割行動の承認あるいは否認を論証する多くの方法を持っている。舞台のパフォーマンズに対しては喝采で称賛を与え、シッターと言ったり、ブーイング、嘲りで批判することができる。しかしながら、日常生活においては、承認や否認を表現するもつと微妙な技法が普通使われる。④継続的観察。継続的に実行を観察することで、観客は役割行動の維持に寄与する。ある役割を変えようと望んでいる人は、地理的な変更なしには困難であることを悟る。そのような行為者は、その役割の実行を維持し、支えるはずの観客から逃れなければならない。ある人が幾つかの役割を演じている場合には、観客はそれらを区別し、一定程度の弁別性がそれらの役割の間に維持されるように保証

する。

(iv) 観客に対する関係におけるパフォーマンス。ゴフマンはいろいろな種類の観客の例を挙げている。⁽²⁵⁾ ドラマの公演、ナイトクラブのショー、バレエやオーケストラの公演は、観客なしにはパフォーマンスがあり得ないから、純粋なタイプのパフォーマンスである。コンテストや試合は見るために提供される場合には、その次に純粋である。何故なら、活動の全ては、自分達を駆り立てているのは出場料ではなく、競技の最終的な結果であるかのよう、競技者が行動することにかかっているからである。結婚式や葬式のような個人的な儀式は、もつと純粋性が少ない。最も純粋でないのは、ゴフマンによれば、作業のパフォーマンスである。人々に見られていても、ドラマ的要素に対する関心は全くないからである。「パフォーマンスの間のこれらの違いは活動の公式の顔 (face) を表しているものであって、その基底にある性格や意図ではない」。たとえば二人の人間の会話においても、話している人はパフォーマンスであり、聞いている人は観客である。また、想像上の観客に対する身振りや話し方の訓練の場合。このように従来、見過ごされて来た例にも観客は存在している。

(v) ゴフマンは実際のフェース・トゥ・フェースの相互行為と劇の一部として上演される相互行為を区別する編成実務・慣行 (transcription practices or conventions) として八つ挙げている。⁽²⁶⁾ ①舞台とそこで描かれる世界を分ける場所的境界。カーテンを上げて、劇の始まりを告げる。②観客を舞台上の活動に没入させるために、天井が無いか、高く、一方の壁がないオープンな部屋。これは子細に検討すると途方も無い装置なのである。登場人物のやることなすことが晒されていることではなく、そのような晒しに対して登場人物が如何なる保護的・補償的な調整もしないこと。③会話の相互行為が環境的に開かれていること。観客は他の観客と直接には向き合わない。観客は

文字どおりに舞台との出会いを見ることができるよう正面を向いている。④誰も舞台の焦点である正面と中心を一時に与えられるようになっていく。舞台上で現に会話に参加していない者は焦点から外れるようになっており、観客の注意は話し手に導かれる。⑤話の転換は最後まで尊重され、返答の転換が行われるまでは、観客の反応は待機する。このように、観客の反応が舞台上の相互行為に体系的に組み込まれている。⑥「打ち明け話による補償 (disclosive compensation)」という基本的な編成慣行。実生活においては、話し手は不適切な話題、関心の無い話題を避け、新参者には必要な情報を与えるなど、自分自身と聞き手の間に関与の共同の自発性を達成としようとする。舞台においては登場人物に関する一般的な知識を持つ大きな観衆を対象としており、舞台上の役者が観客に会話を向けたりすれば、ドラマの幻想は失われる。登場人物は台本通りに台詞を言えるだけである。観客は密かに必要な情報だけを与えられる。観客は舞台には何も持ち込めない。しかし他方では、観客が「観劇の中に」何も持ち込まない場合には、やはりそのドラマは失敗するであろう。⑦舞台での会話は、日常生活のそれよりも長く、大袈裟である傾向がある。これは役者が良く聞こえるように、旨く伝えられるようにするためである。さらに、劇作家・脚本家が平均以上の才能・教養を持ち、多くの時間、努力をするためでもある。その上、十分に用意・訓練された会話を話すということもある。⑧日常生活においては、安定した人間関係においては、あまり新しい情報もたらされず、関係を危険に陥れることも起こらない。他人は当事者が「自然に振る舞っている限り」無関心である。ドラマの相互行為においても、このスタイルが多かれ少なかれ、順守される。しかし、この場合には、起こることは何一つ驚異的でないもの、あるいは無意味なものはないという想定に基づいて、高度な意味をカヴァーするものとしてである。観客は何に注意すべきかを選択する必要はない。利用可能にされているものは、ちゃんとした理由

があつて、存在するものとして取り上げられているのであると。

(vi) 本当の、あるいは象徴的な出来事と、観客の現在あるいは不在 ポール・ヘアに基づいて多くの活動を比較すれば、もっと観客について理解することができよう。⁽²⁷⁾

左欄には役者・行為者の観客に対する関係が述べられている。観客の規定がある場合とは、観客が期待されているが、必要とされているわけではない。出来事が現実的とは、その集団が完成すべき仕事を持つているという意味であり、象徴的出来事とは役者・行為者の行動が彼らの実際の行動に暗黙に含まれている意味を越えた意味を伝えようと意図している場合である。右下の出来事は、役者・行為者の役割関係が、彼らが提示しようと望む幻想に支配されており、実際の日常生活の関係とは、あつたとし

出来事の性質と観客への関係によって分類された活動

観客への関係	出来事の性質 (事例)	
	現実的	象徴的
観客なし	家族、作業集団	カルト・メンバーの集会 社交クラブの入会式
時々の小規模の観客	キブツまたはその他の実験的共同体、遠征を用意する産業	雨乞いのような儀式
観客の規定がある	裁判、結婚式、アマチュア・スポーツ	聖職者、呪医などによって行われる宗教的儀式
実行を期待されていない人々によって構成される観客	公的な場所での犯罪、テロリズム	街頭劇場
パフォーマンスのために必要な観客	プロ・スポーツ	舞台の劇、ミュージカル、ダンス・ショー、またはその他の娯楽

でも、ほとんど関係がない場合である。

B ドラマの制作過程

(1) 上演可能なアイデア

ドラマは「上演可能なアイデア (actable idea)」で始まる。イメージ、テーマ、筋、台本の四つの概念がある。これらのアイデアは機会毎にいちいち用意しなければならないわけではなく、その状況に適切な役割のセットを用意する「事前のテクスト (pre-text)」という形で、普通、利用可能である。「上演可能なアイデア」という概念は精神障害の治療や心理カウンセリングなどで使われる心理劇 (psychodrama) の実務で使われている。心理劇は、患者・カウンセリングを受ける者が抱える問題を、その問題の局面を表す場面を実際に演ずることによって自身で解決策を見いだすことを目指す。何が問題なのかをインタヴューによって理解した上で、医師・カウンセラーは患者等が場面を設定し、助演者を選ぶことを可能にする、「上演可能なアイデア」を探すことになる。心理劇は、社会的相互行為は何らかのアイデアを巡って組織されるといふ基本的な考え方に基づく。⁽²⁸⁾「上演可能なアイデア」は目的と様式 (purpose and mode) の二つの局面を持つ。この場合、目的とは他者を統制しようとする⁽²⁹⁾ことであり、様式とは他者に受け入れられる状況の定義（あるいは慣行の特定）の仕方である。四つの概念は演ずるべき役割の記述が比較的単純で、漠然としたものから、複雑なものへ、という尺度に沿っている。

① イメージ (image) たとえば、「ゲッター」、「血の粛清」、「どんちゃん騒ぎ」、「メー・デイ」などのように、感情が込められた言葉、物、出来事。イメージは役割の分化があまりなく、課題・任務も厳密には決まっていない、

非公式の集団や治療集団における相互行為を導くことが多い。このタイプの集団では、イメージが示されると、それを巡って対立が起きることがある。対立が厳しいと、極化に至る。そのイメージを大切に思う者がリーダーになる。

② テーマ (theme) ミュージカルの楽譜にあるような、時間に沿った動きの示唆と演じられるべき最小限の役割セット。あるテーマを巡って組織される相互行為は、パニックに陥った、暴動的、あるいは忘我状態にある群衆の行動のような、集団行動の事例に見られる。

③ 筋 (plot) 一層詳細な脚本 (scenario) で、なされるべき諸役割と、集団がある目標に到達するために通るべき諸段階について、より詳しく述べられている。たとえば、不正義と闘う政治運動のように、ある共通の関心事のために何かを一緒になつて行う社会運動。

④ 台本 (script) 社会的行動のための最も完全な指示のセット。それぞれの役者・行為者の役割が、一連の場の展開に沿って、特定されている。組織における人々の行動は、この形態を取る。さらに、たとえば、「人生の台本 (life scripts)」に関するバーンとスタイナー⁽³⁰⁾。

一つ以上の台本、筋、テーマ、イメージが同時に関わる場合がある。ライマンとスコットは言う⁽³¹⁾。「人生とは、人々が意識しているか、意識するようになる目標を追及する人々の間の出会い、エピソード、そして関わりによって構成されているとすれば、その時には、人間の行動の基本的な構造は葛藤であると思われる」と。

(i) イメージ ヘアとブランバークはキャサリン・モロッコが上げる例を引用する⁽³²⁾。これは集団として物語を語ることに協力する高校生の自己分析集団の例である。リーダーは何を議論すべきかについて何も言わない。メ

ンバーは、自分達が前に教室で見た映画を話題にする。それは針金と布で作られた母猿に乳をねだる子猿の様子を撮影したものである。話し合いにつれて、ドラマのイメージが膨らみ、親の応答の欠如によって、子猿の社会的、性的発達が阻害される様子が、メンバーによって物語られる。「誰か」「親」「子」「クール・ガイ」などの人間を表す言葉が描写に使われる。モロッコは集団のイメージが展開する四つの段階を指摘する。①メンバーが不確かな、形の無い感情を経験する。②メンバーの感情を表現する私的なイメージが一人のメンバーによって導入される。③他のメンバーがそのイメージを広め、練り上げる。④メンバーの共有の見方がある物語、冗談、あるいはゲームとして表現されると。

(ii) テーマ ラリー・コ克蘭が引用されている。⁽³³⁾ コ克蘭は個人の行動を導く「テーマ」と同様な意味で「立場 (position)」という用語を用いているが、この言葉は「ある時期、あるいは期間を通じた、ある人の存在の秩序の描写」を言い表している。コ克蘭はこのような「初期の物語 (incipient story)」の例として、怒りの感情を例に上げる。「怒りの状態においては、人は違反に狼狽する。すなわち、人はその道德違反を判断し、それをあらゆる性質の（実際の、あるいは想像上の）証拠で煽り、違反者の性格を糾弾し、そして復讐、処罰、つまり秤の平衡化へと動く。怒りを覚えるとは、特定のタイプのドラマチックな経験、あるいは存在の仕方につつまむことである。展開する実際のドラマは人が取った怒りの立場に適うであろうし、あるいは、ある種の超越、怒りの放棄を含む、多くのタイプの障害、悶着の種、そして迂回を伴うかもしれない」と。

(iii) 筋 人類学者ヴィクター・ターナーの言う「社会的ドラマ (social drama)」の例。⁽³⁴⁾ ターナーはザンビア (Zambia) のヌデムブ (Ndembu) の人々の葛藤への性癖を、ある「緊張状態の爆発」事件で観察した。それはド

ラマの「行列形態 (processional form)」である。

①破綻。人々あるいは集団の間で、通常の社会関係の破綻が生ずる。破綻はある個人によって起こされるけれども、その個人は、他の当事者が意識しているか否かにかかわらず、他の当事者のために行爲し、あるいはそう信じている。すなわち、象徴的破綻には常に何か利他的なところがある。

②危機。破綻には、高まる危機の段階が続く。その破綻が直ぐに密封することができないと、その危機の間に破綻が拡大して——葛藤、あるいは敵対状態にある当事者達が属している——極めて広範な主要社会関係セットに存在している優勢な裂け目と共存する所まで行く。

③是正行動。混乱させられた社会システムの指導的、あるいは構造的に代表的なメンバーによって、是正行動という、非公式あるいは公式の、制度化されているか、特別の「メカニズム」が迅速に取られる。破綻の深さと共有された社会的意味、危機の社会的な広がり、破綻が起こった社会集団の性質、より広範なあるいは外部的な社会関係システムとの関係での自律性の程度などの要素によって、これらのメカニズムはタイプと複雑さが異なる。このメカニズムは個人的な忠告と非公式の仲裁・調停から、公式の裁判・法的機構、そして——特定の種類の危機を解消し、あるいは他の解決様式を正当化するための——公的な儀式の挙行にまで及んでいる。

④再統合。あるいは競合し合う当事者間にある修復不可能な分裂の社会的承認・正当化。この第四段階の後で、社会構造は顕著に変わるであらう。

これらの諸段階のそれぞれは、それ固有の言葉と行動を持つ。行列主義の「構造」の基底には、「公共心 (communitas)」(人々を、いかなる社会的な結合を越えて統一する結びつき) という「反構造」がある。

(iv) 台本 代表的な文献はロジャー・シャンクとロバート・エイベルソンである。⁽³⁵⁾ シャンク／エイベルソンの有名な「レストラン・スクリプト」。われわれはたとえば、フランス料理のレストランに行った時に、どのように一連の行動を組み立てるかについての台本を持っている。われわれはマービン・ミンスキーが言う「常識」、あるいはウンベルト・エーコの言う「百科辞典」を頭の中に持っており、事態に応じて自在に使いこなしているのである。それらの「常識」「百科辞典」は多くの台本を含んでいるが、単なる知識・技術の集積ではない。筋の特定状況、一定の段階・時点でのように感じるべきかについてのアイデア、そこに居合わせた他者の感情・意識と調和させて事柄を編成し、成功へともたらず能力なども含まれる。たとえば、家族の食事についての台本は、登場人物、食べ物・飲み物リスト、話題のリトスなどの他に、「家族の食事とはそもそもどのようなものであるべきか」という観念を含んでいる。

「『明示的に構造的なルール』の日常生活における大きなネットワークはドラマの出来事・行動に強力な影響を及ぼすであろう。特に、階級・ジェンダー・性的選好・障害・年齢・人種から生ずる社会的行動の主要な再評価が存在して来た。ゴフマンは台本化の最前線にジェンダー・ルールを位置させる⁽³⁶⁾。『遂行された役割において表現されること……を通じてのみ、制度は実際の経験に現れることができる。制度は、『プログラムされた』行動の集まりを伴っており、それはドラマの書かれていない台本のようなものである。ドラマの実現は、規定された役割の生きた役者・行為者による、強化された遂行次第である。役者・行為者はそれらの役割を体現し、一定の舞台で表現することによってドラマを現実のものにする。この繰り返しされる実現を離れては、ドラマも制度も経験的に存在しないのである⁽³⁷⁾」。

(v) 事前のテキスト 劇作家・脚本家はドラマの書かれた台本を「事前のテキスト」と呼び、舞台の上での実際のパフォーマンスを「テキスト」と言う。台本は行動のガイドであるが、行動に代わるものではない。役者はその台本を行動において解釈することを要求される。ライマンとスコットは個人が実生活において、それぞれの状況に適切な行動に関して、帯同するアイデアが「事前のテキスト」であると考えられると示唆する。³⁸ たとえば、学生が就職試験の前に、想定問答に基づいて面接の練習をする場合。劇作家・脚本家は自分の劇が上演されるのを見て、遂行された新解釈と一致するように台本を書き換えるかもしれない。社会的行為者も同様に振る舞うことがある。これらの場合には、相互行為の秩序・構造から、相互行為の技法の領域に移る事例と言えよう。

(2) 上演 (staging)

場面 (setting) がパフォーマンスに及ぼす影響と場面・舞台が行動の「フレーム」であることが、ここでの考察の対象である。

(i) 舞台装置 (stage-set) ケネス・バークは言う。「……舞台装置は（行動のための基準という点で）『多義的なかたちで』行動を含んでいる。そして劇が展開するにつれてこの多義性は、それに照応する『分節的明示性』へと変換される。場面と行為との間にある比率は、暗示性と明示性の比率にひとしい、といえよう。たしかに舞台装置の細部から、その後に起こる演技の細部を推論することはできない³⁹。しかし、場面の性質から行動の性質を推論することはできよう。一般的に言って、いかなる場面も適切な行動の仕方を示唆し、それ故に、ある個人がその場面に入って演じるであろう、可能な役割の範囲を示唆するのである。「場面」はゴフマンの「フレーム」に当たると言える。「フレーム」は「ここで行われているのは何か」という問題に答えることを助ける。ゴフマンは真剣

な、目標に向けられた活動と遊びを例に挙げて論じているが、言葉・ジェスチャー・顔の表情、あるいは文脈の指示などによって「これは遊びです」ということが示されれば、それは真剣な行動とは違った文脈を示し、したがって、そこで行われる役割の種類も違ったものになる。⁽⁴⁰⁾

(ii) 政治的場面 ドラマツルギーの考え方の適用可能性が理解されるずっと前から、政治過程というものは劇場的で、イメージを売る、ショー・ビジネスの比喩が大規模に適用され得るドラマチックなスペクタクルであると考えられていた。しかし、政治過程は人生における他のドラマツルギー的事態と質的に違っているわけではなく、ただ文脈が違っただけであることが分かって来た。「最もうまく行ったパフォーマンスはそもそもパフォーマンスとしてではなく、本当の事としてやり終えたパフォーマンスである」というわれわれの観察に対する例外として、政治は明らかにパフォーマンスとしてやられているが、それにもかかわらず、影響力・意義・目的を持っているのである。政治家の個人的な意図ではなく、観客の反応が政治的行為の意味を確立するから、印象管理は政治過程にとって中心的である。

政治過程をドラマツルギー的に見ると、儀式が重要であり、表現が事をなし、手段は目的よりも意義があると言ええる。政治的な儀式は凝集と差異化という二つのジェスチャーによって、観客に「自分達のような人々にとつて」良い人か、悪い人かを伝える。権力もまた制度的な取っ手を引くことで自動的に出て来るものではなく、ドラマツルギー的にイメージをうまく捌くことから出て来るものなのである。権力を人々を自分達の意思に反して動かす構造と見るのではなく、イメージの象徴としての力が人々を動かすのである。「あなたがこころあたりで権力を持っているのは、人々があなたが持っていると考える程度にに応じてのみである」⁽⁴¹⁾と。

(iii) 日常生活の場面 日常生活の出来事は、多くの周知の場面、つまり、教会・工場・レストラン・家庭・公園・学校・裁判所・病院などで起こる。これらの慣行的な場面と結びついているのは、その場面でルーティーンとして期待されている行動パターンである。それらの行動は時と場所にふさわしいか否かで評価され、役割を占める個人とは独立している。これらの行動パターンは人に対して、当然のこととして、問題なしに行われる活動を定義している。このパターンは誰がその場面に入る資格があるか、ルーティーンの仕事の配分の仕方、入った人々の評判と運命を限定する。このように、社会組織のこのように当然で、常識的な特徴は、実際的な関心事である。ある人の目標が何であれ、慣行的な場面は行動分野として利用可能な環境の特徴の一つなのである。

大抵の大人にとって、可能な場面の範囲は極めて広く、一日の活動は人々が定期的に訪れる、時々しか行かない、避ける場面という形で区別されている。選択がきかないことがしばしばである。働く場所のように、定期的な出席が義務づけられていることもある。しかし、最も利用可能な場面は、個人が選択あるいは避けることができる選択肢を持っている。場面のパターンは主要な活動・機能を指し示すだけでなく、その場面で何が二次的な、あるいは選択的活動としてふさわしいか、正当であるかをも指し示す。このように人々は社会的生存の必然的、あるいは偶然の問題が効果的に受け入れられる形で取り扱われ得る、多様な場所を持っている。場面によっては人々が精一杯努力しなければならないこともあるし、人々の能力を越えていることもある。人々はある行為を遂行、あるいは遂行に失敗することで困惑し、信用を落とし、降格されるかもしれない。ある種の行動パターンは内部のものにしか分らない。場面はルーティーンでも正当でもないが、しかし可能である仕方で搾取されるかもしれない。ある場面が免責を伴って搾取されるされ方は、場面の重要な特徴の一つである。場面は居合わせた人々によって取り上

げられる不都合な行為、容赦される不都合な行為、サンクションの種類、サンクションすることが自由放任か、公式かの程度によつて異なつて⁽⁴²⁾いる。

(3) 役者・行為者と役割

(i) ドラマツルギー的役割 舞台の主要な役割のうち、主役・敵役・脇役・チーム・観客については述べたので、ここでは若干の補足を行う。まず劇作家・脚本家の役割は、相互行為を導くイメージ・テーマ・筋・台本を用意することであるが、行動の時には居なくても良いし、テロ行為の場合のように、むしろ身を隠すこともある。小集団では主役その他の人が兼ねることもある（と言うよりは、劇作家・脚本家が主演もする）。主たる役者・行為者が自分固有のテーマを実行しているのか、誰か他人のドラマでヒーロー、悪役、道化を務めているのかは、重要な分析点である。

監督の主たる役割は、舞台のために劇を仕上げることである。仕事は台本を初めて読むところから始まる。テーマを見つけ、筋、副次的筋・テキストを維持・順守し、ドラマのクライマックスを位置づけ、スタイル・登場人物・関係を理解し、そして上演を目に見えるものにする。監督は実際の上演中も舞台に出て行く前の役者を脇でコーチし、舞台の袖で見守り、観客が帰つた後でもコーチする。日常生活でも軍隊の指揮官、仕事の監督、スポーツの監督・コーチ、儀式の主催者などのように、この役を演じている人が容易に特定できる場合がある。しかし、大規模なデモの場合のように、居たとしても観客には分からない場合もある。小集団、特にくつろいだ関係集団の場合には、フル・タイムの監督は必要ではなく、メンバーの誰かがその役を務めることが多い。劇場のように、活動が複雑な場合には、監督の役割は、機能の違う複数の人間が共同して行うことになる。

集団が自立せず、資金を出す個人あるいは組織が別にある場合には、プロデューサーが必要になる。プロデューサーは観客には見えないが、資金は配役や舞台装置・映画のセットの質と量とによって決定的である。

劇作家・脚本家は新しい理解・過程・出来事を用意するのであるから、最も高い創造性を必要とする。監督は、精々、劇作家・脚本家の用意した状況の定義に若干の解釈を付け加えることができるだけであるが、それでも劇的な創造性を発揮する人々も居る。俳優も創造性を必要とする。

(ii) 役割と役割を演ずること 役割の概念は社会学・社会心理学にとつて極めて重要なので、膨大な文献があるが、テオドル・サーピンの他には、ドラマツルギーの文脈のものはあまりない。サーピンにとつて、役割を演ずること（あるいは、社会的相互行為）は、個人と集団、個人史と社会組織の間に架かった橋なのである。サーピンは役割の一般的な局面を明らかにするために役に立つ多くの概念を用意している。まずサーピンはある役割の適切性・妥当性・「納得性」(appropriateness, propriety, convincingness)を問う。①その行動はその行為者に認められた、あるいは獲得された（帰属された）、あるいは達成された）社会的立場に適切であるか。すなわち、そのパフォーマンスは、行為者がその行動が行われる環境的文脈（場面）を考慮に入れて指し示しているか。要約すれば、その行為者は適切な役割を選択しているか。②その役割を演ずることは正当か。すなわち、公然たる行動は観察者に対して評価基準として仕える規範的標準を満たしているか。そのパフォーマンスは良いと評価されるべきか、悪いと評価されるべきか。③その役割を演ずることは納得的か。すなわち、その役割を演ずることは観察者を導いて、現職者はその地位を正当に占めていると疑う余地なく宣言させるか。

ラルフ・ターナーも同様のことを言う。「行為者と他者が特定の役割に居るといふ」その想定が相互行為の安定

した効果的な枠組を用意することによってうまく行く限り、行為者は彼らと彼らが相互行為する他者が特定の役割にあるかのように行動するであろう。彼らは、間断無く次々の行動を評価し、その行動が——期待に一致し、一貫性を論証することによって——ある立場の占有を立証する、あるいは確認するか否かをチェックすることによって、その想定を検証する⁽⁴⁴⁾と。

サービンは役割を演ずることの三つの次元を役割の数、有機体の関与 (organismic involvement)、つまり、役割に費やした努力の量、先買性 (preemptiveness)、つまり、役割に費やした相対的な時間の量を区別する。

ヘアとブランバークは、サービンが提起する五つの有用な概念を挙げている。①役割期待 (role expectations)。ある役割セットのうちの補充的な立場に伴う、ある社会的地位の権利と義務。②役割位置 (role location)。役割システムの用語で人が「あれは誰」「私は誰」を決定する認識過程。③役割要求 (role demands)。ある所与の場面である人について要求される可能な役割行動の範囲。④役割技量 (role skills)。若干の仕事や、ある一定の能力水準で、遂行する身体的、心理学的な万端の即応態勢。技量は認識的である (他者の役割を取る) と共に、運動的でもある (姿勢、動き、顔の表現、声の調子)。⑤自我—役割の合致 (self-role congruence)。自我とは、ある人が物、体の一部、他の人々と相互行動することから生じたアイデンティティの経験である。役割を演ずることは、その役割の諸要件が自我の特徴と合致している時に、一層効果的である⁽⁴⁵⁾。

サービンの五番目の点に関してはラルフ・ターナーの言う「自我—役割の合流 (self-role merger)」も同じ趣旨であろう。⁽⁴⁶⁾ われわれが演ずる役割は集団の目的を達成することと、個人の自己評価を他者から強化されることの二つの目標を持つ。ターナーは、人々の「本当の自分自身」についてのイメージはその人々が「制度」を強調するか、

「衝動 (impulse)」を強調するか次第であると言う。前者であれば、人々は制度に投錨されている感情・態度・行動に真の自分を見る。後者であれば、飼い慣らされていない衝動に真の自分を見るが、その真の自分を犠牲にして制度の規範に同調する。ターナーは過去数十年の間に制度から衝動への移行が、アメリカ社会において起こったと言う。

(iii) 役割を取ること、役割距離、役割疲労、役割葛藤、感情　ここでサーピンの叙述に若干の補充を行う。

①まず、ある役割を取ること (role taking) である。⁽⁴⁷⁾ この概念は普通、役割を演ずること (role playing) と言われていることと同じであると言って良い。極めて厳格な公式組織、たとえば、軍隊においては、役割規定が厳格に定められており、その逸脱は厳しく処罰される。このような場合には、規定された役割を行うというイメージである。しかし、このような場合においてさえも、アメリカ映画『キャッチ22』に見られるように、あるいは多くの組織社会学の研究が指摘する非公式組織の存在が確認しているように、個人的な役割を取ることの違いは残る。一般には推定される他者の役割に基づいて自分の役割の取り方を工夫するのが普通である。その意味で「ある役割を取る」ことはまた「役割を制作すること (role making)」でもある。ある役割を取るとは、他者の役割との相互関係の中で行われる試案的なものであり、相互行為の展開につれて変わって行くものである。たとえば、父親の役割は子供の役割なしには、存在さえしないし、子供の成長につれてどんどん変わって行く。それだけではなく、自己の役割もまた、他者の役割との相互行為の過程で変化して行く。自己がある役割を取る時に、問題になる複数の他者の役割を「役割セット (role set)」と言う。人々は複数の役割を持っているし、一つの役割の中で要求される行為は複数であるから、どのようにそれらの行為、あるいは複数の役割のそれぞれにおいて要求される多数の行為を

まとめ上げるかが重要である。そのまとめかたの一貫性は結局、他者によって判断される。それは外部的評価である。しかしながら、それだけではなく、内部的な評価もまた行われる。

② 役割距離 (role distance)。これはアーヴング・ゴフマンによって最も良く解明された概念である。⁽⁴⁸⁾「個人とその個人が担っている想定される役割との間のこの『効果的に』表現されている鋭い乖離を役割距離……と呼ぶことにする」。「個人は、実際に、その役割を拒否しているのではなく、すべてを受け入れるパフォーマンスにとって、その役割のなかに当然含まれていると見なされる虚構の自己を拒否しているのである」。「われわれは、状況の定義という観念から出発するのではなく、特定の定義がその状況を管理しているという考え……から出発しなければならぬ。個人は次のように言うために行為する。『私は物事の成り行きに逆らわないで、それについていく。しかし、同時に、私はその情勢にすつかり包み込まれていないことだけは、知っておいていただきたい』。ゴフマンはまずメリーゴーランドに乗る乗り方を例に、ある年齢に達した子供がいかに自分が「ただメリーゴーランドに必死で乗っているだけではない」かを示す行動を例に役割距離を説明する。次にゴフマンは真面目な活動として外科医の行動を例に説明している。「役割距離の概念は、責務と実際のパフォーマンスとのあいだにある乖離の一類型を扱う社会学的手段を提供する」。役割距離はパフォーマンス達の包括的な年齢・性的特徴を土台として予想できるから、それは典型的役割の一部分なのであり、その状況で入手できる標準的な人格的諸要素で作りに出される。

③ 役割疲労 (role fatigue)⁽⁴⁹⁾。人々が日常生活の中で、もはや満足の行かない役割に置かれ、非生産的な役割遂行が続くために、その役割遂行に必要なエネルギーが失われる場合である。一般に「バーン・アウト (burn-out)」と呼ばれる、他人を援助する仕事をする人々によくある現象である。身体的な症状は極度の疲労、緊張、睡眠障害、

背中痛・頭痛などであり、情緒的症狀はシニシズム、いらつく、神経質、熱意の喪失、頼りなさ、挫折、疑い深さ、厳格さなどである。低下したパフォーマンス、イニシャティヴの喪失、退屈、欠勤、疎外が行動に現れる。

④役割葛藤 (role conflict)⁽⁵⁰⁾。「多くの役割葛藤の研究は、適応のダイナミックスが、二つ、あるいはそれ以上の両立できない「期待の」セットに合致しなければならぬ緊急の要求に直面して、どの期待セットを尊重するかを選択に主として存するかのように進められる。同調が他者の役割への実用的な適応の一タイプに過ぎないという見解を受け入れるならば、その時には、役割葛藤は重要な他者の役割との、何らかの種類の実用的な関係を確立しようとする試みという観点から見るべきである。その最も一般的な意味で、役割葛藤は、二つの違った重要な他者の役割に対して、期待への同調による対処か、あるいは何か別のタイプの反応によるか、同時に効果的に対処する、直ちに明らかかなやり方がない場合に、存在するのである」。ラルフ・ターナーは、現代の女性が伝統的な女性の役割の考え方に従うか、平等主義的な考え方に従うか、男も女もいろいろな考え方の人が居るので、基本的な役割葛藤であると言う。

⑤感情 (一時的な社会的役割)。サーピンは感情を定義して、情熱と呼ばれる出来事のクラスに行為者が割り当てられる一時的な社会的役割であると言う⁽⁵¹⁾。ヘアとプランバークはここで、一人の人が街頭で救助を要する状態にある時に、通行人がどのように対応するかという社会心理学の実験の例を上げる。通行人はその人に対する同情から、自分達の日常的な役割行動を一時的に放棄して、人を助ける役割を取る。もう一つ、親が子供に食べ物を提供したのに、子供がそれを拒む例が上げられている。この例では親の怒りは自分の親としての役割が挑戦されたからであり、怒りの時間は親の役割の再設定の移行時間として役に立っていると言う。

(iv) 通時的な役割の展開——ウォーム・アップから役割保存へ。これまでの叙述は専ら、役割の内容や役割を演ずることに伴う問題についてであった。最後に、通時的な視点について述べよう。⁽⁵²⁾ ルイス・ヤブロンスキは〈ウォーム・アップ (warm-up) ↓自発性／創造性 (spontaneity／creativity) ↓役割保存 (role conserve)〉のサイクルを考へるが、ヘアとプランバークは第一段階として、ウォーム・アップの前に、人がある役割に入る前に、前の演者によって確立されたその役割の権利・義務を定義する、何らかの初期役割保存があると言う。さらに、最後の役割保存の前に、「役割を脱ぐ」と (derolling) の期間があると言う。

①ウォーム・アップ。ある集団において役割を演ずる第一の期間として、その役割が要求している技量の水準と、他の集団メンバーと共有している状況の定義へと知的に、しばしば身体的にウォーム・アップすることが伴う。消防士や警察官などの危機的役割は、緊急事態に直面して、一瞬のうちに事態に対応しなければならぬから、ほとんど考えることなく、必要なことを行うことができるように、十分に練習をしておかねばならない。別の極はオリンピックの競技者である。ウォーム・アップには十分な時間があり、必要ならば、本番の競技の前に試技を行うこともできる。練習が必要な場合には、練習期間は別の段階を構成する。サービンの有機体の関与はこの期間の問題であり、状況が自分にとって重要だと思ふ者はエネルギーを使うし、そう思わない者はほとんどエネルギーを使わないであらう。

②自発性／創造性。ウォーム・アップの段階の後に、若干の自発性／創造性が發揮される段階が続く。自発性とは「新しい状況に対する適切な反応、あるいは古い状況に対する新しい反応」である (Moreno)。新しい状況に対する反応がそれ以上のものを要求しており、関与した人にとって状況を再定義するものである場合には、若干の水準

の創造性が達成される。ほとんどの役割は、人々が機械的に対応できる程には行動が明示的に規定されていない。規定されている場合でも、状況の一寸した変化が、自発性を要請する。生産ラインの労働者は、自分達の退屈をまぎらわせる程度の自発性しか発揮しないが、研究職の人々は自分達の役割を果たすために、かなりの自発性／創造性を発揮しなければならない。しかし、同じテーマについて講義する二人の教授のうち一人は使い古したノートを読むだけであり、もう一人はその授業の要求を十分に満たす、自発的な講義をするかもしれない。

③役割を脱ぐこと。人がある役割から脱して、別の役割に移る時に、役割を脱ぐ過程を通る。それは一瞬である場合もあるし、時間がかかる場合もある。前者の例としてはアフター・ディナーの会話の場面。食事では主役だった人が場所や衣装を替えることもなく、体の位置や注意の程度の一寸した変更だけで、脇役や観客に変わる。職業的な役者のように達成された役割の場合には、化粧を落とし、衣装を替えて、時間をかけて舞台の「ハイ」の状態から降りる。どんな文化でも、誕生・青春・結婚・老年・死亡というライフ・サイクルの中の主要な移行に伴う役割の変更のための儀式を、持っている。ヴィクター・ターナーはそのような時期を「閼 (liminality)」と呼ぶ⁽⁵³⁾。

④役割保存。これまでの役割を演ずる過程の産物が役割保存であり、それはその役割の新しい理解である。役割のアイデアだけではなく、自我のアイデアもまた、役割を演じたことで変わるかもしれない。

二 ドラマツルギーの技法⁽⁵⁴⁾

(一) 社会的相互行為秩序の前提と仕組み

(i) 相互行為秩序を支える合意の「錯覚」 アーヴィング・ゴフマンは「共在」状況、つまり人と人が居合わせる社会的場（たとえば、パーティ・平日の職場・ピクニック・オペラの夕べなど）あるいは場面における社会的相互行為の秩序に関心を合わせた。われわれは一般に、共在秩序は礼儀作法や社会的なマナーに従っていれば維持されると信じている。しかし、この道徳的信念は、礼儀作法に従ってわれわれの行動が統制でき、われわれの行動の意味も相手方に「正しく」伝わるという前提に基づいている。確かに、われわれは相互行為の度毎に、相互の行為の意味や規制、相互の行為に対する期待を作ることとはできない。それではそもそも相互行為秩序は成り立たないからである。ある社会的場面、たとえば、告別式などでは、行動の目録、役割の分担、ふさわしくない行為の制裁規定、場面展開の段取りが前もって決められている（Bp. 19、訳二二）。しかも、共在状況の参加者達は、それまでのやり取りの生活誌と共有されている文化を帯同して参加しているのである。これらの経験や知識によって、相手の意図を読んだり、相手に相応しい行動や話ができる。特に、年齢・ジェンダー・階級・人種・職業は重要である。実際、参加者達は、自分が従っている「慣行」を、相互的契約や合意に基づいた「現実化慣行システム」を構成するものと考えている。しかし、これは実は「錯覚」なのである。ゴフマンはこのような考え方は社会的契約説、あ

るいは社会的合意説（これらは伝統的な社会学の発想である）であるとして、これらの説に共通するのは①他者に当てはまる拘束性は自分自身にも当てはまること、②他者の自己も、彼らの行動に対する拘束性について同じ見方をしていること、③こうした自発的な服従が通用していると全員が理解していることであると言う（1983b: 5）。これら①②③が「全員」について成立しないことは自明であろう。それにもかかわらず、われわれの社会的相互行為秩序は一面では、この「錯覚」によって成り立っていることも否定できないのである。⁽⁵⁵⁾

(ii) 相互行為秩序はどのようにして成り立っているのか 経験するとは、フレームを適用していること（フレームング）なのであるが、この時にフレームそのものは意識されない。フレームングは「フレームング慣行」（FA: 175）の運用によって行われるのだが、この事実そのものは活動のスムーズな流れの中に埋もれてしまう。それが経験がリアルだということなのである。経験していることが経験されずにいる場合にのみ、その経験はリアルなのである。「個人が活動を読み取ろうとする際には諸要素・過程が想定されるが、しばしばそれらは、その活動自体が実際に証明になるようになっていく。そして何故、そうなっており、そうならないのではないかと言うと、社会生活はしばしば個人が理解でき、処理できる何物かとして組織されているのである。認識を誘導しうるけれども誘導しない多くの有効な組織化原理がありうるという事実にもかかわらず、認識と認識されるもの間に一致ないし同形が要請されている。そして、他人がこのことを有効な要求であると考えるのと全く同様に、私もそうするのである」と（FA: 26）。

共在の相互行為のフレームング過程について安川一は言う。⁽⁹⁶⁾ ①「相互行為は相互行為としての秩序を個々に実現しながら構成され続けなければならない。シンボル体系があつて、シンボル操作能力をもった個体がいて、会話の

順番取りルール等のシステム要件（「システム拘束」……）が満たされても、それだけでは相互行為は成立しない。「つまり、システム要件の充足の前提、あるいはその補完として、まずは相互行為そのものが形をなしていなければならない……」。ともすると拡散・錯綜してしまいがちな発話や動作の流れが、接近と回避、防御と保護、補修と救済といった一群の儀礼拘束「後述」の重しで、『自然な境界をもった単位』へ、秩序あるコミュニケーションへとまとめあげられている。いわば、相互行為秩序の「形式」の問題である。②「相互行為は、単に、個々に意味確定されパッケージ化された情報が、いわば後方拘束的に（典型的には『提示—応答』として）連鎖していくものではない。なにしろ、相互行為はプラクティスの目録とその運用慣行の構造を前提にそのなかを進行している。そこでの一つ一つの『ムーヴ（相互行為の指し手）』は、発端においてすでに明確な意味なり機能なりをもっているというよりも、慣習的プラクティスの運用、相互行為の進展とともにそうしたものを獲得していつていた方がいい」。『あるのはただムーヴの継起だけだ』。それらは、システム拘束と儀礼拘束の相補的作動のなかで、諸々のプラクティスに導かれて、流れ全体とのかかわりにおいて、構造化される。③「それゆえ相互行為はムーヴがたえずフレイミングされ続けていく過程であるということができる。しかも、特定の秩序世界における個々のムーヴの位置関係を明示するような形でなされるフレイミングである（「フットイング。Ft. 128f.」）。相互行為内の出来事はたえずフットイング（footing）を続ける。相互行為秩序とは、自己矛盾的でさえある多元性のなかに秩序全体の安定性を維持するしかない」と。

相互行為秩序の前提は共在状況にとつては不可欠のものであり、自明のものであると考えられている。しかし、この前提は実は脆弱なものであるから、間断のない調整作業によって維持しなければならない。自明の前提と脆弱

な実態とは矛盾する。間断のない調整作業をあからさまに行うことは、前提の脆弱性を白日の下に晒すことになるから、絶対に避けなければならない。たとえば、相手のフェース (face) に対する自己の侵犯行為があつた場合に、相手のフェースを損なうことなく、自己の相手に対する敬意の欠如ではないとして（もし敬意の欠如であつたといふことになる）、自己は相手の信頼に値しない人としてフェースを失うか、あるいは相互行為秩序の前提が瓦解するのである）、軽微な調整ミスとして謝罪する。相手が侵犯行為をした時には、同様に不注意かやむを得ない行為として許す。すなわち、礼儀作法に従わない行為はその個人の責任に帰せられるという形で処理されるのである。

(二) 相互行為 (表出行為) と相互行為秩序

(i) 相互行為秩序とはどのようなものか 相互行為はそれぞれの行為者にとつては表出行動である。共在状況とは、一定の役割が演じられる人工の劇場ではなく、あらゆる表出行為が演じられ読み取られる『自然の劇場』なのである (1983b: 4)。しかし、「表出行動」という表現を強い意味だけに受け取つては、事態を間違ふ。そもそも共在状況に身を置いていること自体、当人の選択によるわけではない。「降りる」ことはできるけれども、その場合には社会関係を失い、あるいは社会的不適格者とされる危険が大きいから、ほとんど選択肢ではあり得ない。共在状況に居る限り、既存の相互行為の慣習的プラクティスに委ねる以外にはないのである。「共在とは相互知覚の重層性である。それゆえまた相互適応の重層性でもある。私が周りの動きに適応しようとする。周りが、適応しようとする私の動きに適応しようとする。さらに私が、周りに適応しようとする私の動きに適応しようとする周りの

動きに適応しようとする。互いが互いを『行為のライン』として感受しあい、これにそれぞれのラインを同調させていく。そこに秩序が生まれる。」「こうして、秩序とは一種暗黙の『作業合意』の産物である。』⁵⁷

表出行動は本来、不安定で偶発的なものである。それは参加者自身が身体的心理的な存在であつて身体的心理的な状態に左右されること、表出行動は結局、その意味を読み取る他者次第であることによる。すなわち、人は共在状況にいる限り、意図すると否とを問わず、お互いに表出行動の表出主体であると共に、読解対象でもあるという二面性を免れないのである。さらに、われわれは他者の表出行動の対象でもあるし、読解の主体でもある。安川の言うように、この二面性は極めて錯綜した、循環的な相互行為過程を日常的に惹き起こす。しかも、「役割の束」という表現が示しているように、われわれは普通、多数の役割を担っているから、それらのそれぞれについて、互いに表出主体∥読解対象として、換言すれば、役者・行為者∥観客として複雑で、錯綜した、循環的な相互行為を間断無く行わなければならないのである。ここでエスノメソドロジの会話研究の創始者ハーヴェイ・サックスの言葉を想起することは無駄ではない。「あなたが世間で普通の人とはどんな人かについて何を考えようとも、最初の機略は『普通の人』を何かの人としてではなく、『普通であること』を行うことを自分の仕事、自分の不断の任務とする誰かとして考えることなのである。……あなたが明らかに仕事——とにかく分析的・知的・情緒的エネルギーを必要とする何もの——と考えるものの類推をただ広げるならば、その時にあなたは、たとえば、個人的な特徴などの全ての種類の名付けられた物事が成し遂げられた仕事であり、ある種の努力・訓練等を必要としたことを理解することができよう。」「中核的な問題は、人々がどのようにして『普通である』ことを行うことに取り組むのかということである。第一に、答えは簡単である。あなたが『普通の人である』ことを行うことに取り組むやり

方の中には、いつものように考え、いくつもの関心を持つというように自分の時間をいつものやり方で過ごし、その結果、その晩、普通の人であるために、あなたがしなければならなかったことは、テレビをつけることだけであるということがある。さて、秘訣は何かというところ、それは沢山の普通の人々がやっていることをあなたが偶々やっているということではなく、『いつもの晩である』ことを行うやり方で、誰にとつてもそのようにやることであることをあなたが知っているということなのである。それはあなたが偶々、ほんとうに今夜はテレビを見ようと決めたというのではなく、あなたが今夜『普通である』ことをどのように行うかという仕事を行っていること、そのことに答えを見付けているということなのである。⁽⁵⁸⁾と。本来、複雑で、錯綜した相互行為であっても、いや、そうであればこそ、細心の注意を払い続け、気配りをし続けるならば、日常生活は到底耐えられないものになるに違いない。だからこと、「儀礼的無関心」、「錯覚」なしにはやって行けないのであり、「眠りはあまりに深い」(F.A.:14)のであろう。ゴフマンが「儀礼」に言及し続けたことも、その間の事情を十分に理解していたからであらう。「儀礼」とはまさに、アーノルト・ゲレンの言う「負担免除機能」を果たす、主要な装置だからである。サックスの言葉もこのことを示唆する。

(ii) 表出行動と相互行為秩序 共在状況において行われる相互行為は、行為者の表出行動(フェース・ワーク)であると同時に、「出来事の流れ」を滞りなく進行させて、相互行為秩序を維持するための調整行動でもある(Re:39)。たとえば、パーティの雰囲気を目にする侵犯行為によって(それは「出来事の流れ」を阻害する行為である)、面目を失う(それはフェース・ワークの失敗である)ように、両者は密接に関係する。

群居性の動物においても、その集団・種を維持するために、攻撃姿勢、防御姿勢、攻撃抑止姿勢、求愛行動、営

巢行動、給餌行動などの一定の形式化された行動プログラムが存在している。これらの行動プログラムは、あるいは本能に基づいて備わり（「解発機構」）、あるいは学習にも基づいて習得される。これらの行動プログラムはそれぞれの種によって高度に儀式化されてゐる（RP: 21-22, 88）。これに対して人間の場合は、生得的な行動プログラムをほとんど持っていない。そこで人間にとっては「文化」が「第二の本性」⁽⁵⁹⁾なのである。文化は慣習化に始まり、ルーティーン化する。われわれ人間は生まれ落ちた時から、これらの文化を習得し続ける。それらはミンスキーの言う「常識」、エーコの言う「百科辞典」として、それぞれの人間に備わる。国家や社会、あるいはもっと小さな集団・集合の単位が備える「制度」も行動・判断プログラムを提供する。言語における統辞法や多くのスクリプト（たとえば、レストラン・スクリプト）のように、かなりプログラム化されたものも沢山あるが、多くは単なるイデオム（慣用）に過ぎないであろう。相互行為秩序を維持するための「用法の交通整理」の仕掛けもある（1983b: 9）。われわれはこれらの行動プログラムとイデオムを活用しながら、フェイス・ワークと「出来事の流れ」の維持に努め、相互行為秩序を維持し続けるのである。

(三) 儀礼秩序としての相互行為秩序

人々の相互行為は一定の社会的場・場面において行われるが、人々はそのような場・場面において一定の状況の定義を投企する。それら複数の状況の定義の間で参加者達の暫定的な「作業合意」(D.S.10) が成立すると、その状況の定義の投企と同時に、あるパターンの行動が状況に適切な行為、公認の行為として承認される傾向がある。

ゴフマンはこのような相互行為における状況の定義の単一性(相互行為秩序)を支える道徳原理、行動の状況適切性を承認させている道徳原理として儀礼秩序を考えるのである。⁽⁶⁰⁾ 前述したように、社会的場・場面に居る人々は「フェース・ワーク」と「出来事の流れ」の両者を志向する。「フェースを保つ」という観点からは、そこで、会話の相互行為の慣行的な組織があることは良いことであり、会話のメッセージの秩序ある流れを維持する観点からは、自己が儀礼構造を持っていることは良いことである」(IR: 39)。

(i) 自己の儀礼的分業 (R: 31-33) ゴフマンは自己の二重の定義を用いる。「ある企てにおける出来事の豊かな流れの表出的なインプリケーションから継ぎ合わせられたイメージとしての自己」と「判断を要する状況の偶発事と……対処する儀礼ゲームにおける一種のプレーヤーとしての自己」(IR: 31)である。相互行為者がお互いに自己の儀礼的分業を認め合うことによって、お互いの自己イメージを維持しようというのが儀礼秩序である。共在状況においては侵犯行為やパフォーマンスのミスが起きることは致し方のないことである。相手が自分の自己イメージを侵犯する行為を行った場合には、それは取るに足らないことだとか、不注意による仕方のないことだとか、やむを得ない事情があるものとして扱うことで、自己イメージを護る。自分が相手の自己イメージを損なう行為をした場合には、本意ではないとか、単なる手違いであるとして、直ぐに謝る。このようにして侵犯行為やパフォーマンスのミスを「プレーヤーとしての自己」の責任とすることで、結局は両者の「イメージとしての自己」は護られるのである。その際、自分の「イメージとしての自己」と相手の「プレイヤーとしての自己」、自分の「プレイヤーとしての自己」と相手の「イメージとしての自己」がうまく補い合う関係に立っていなければ、事は上手く行かない。これを保証するのが儀礼秩序なのである。

(ii) 相互行為の儀礼技法——回避儀礼と呈示儀礼 (R: 62, 95) 儀礼の原理の中核は「フェース・ワーク」である。「フェース」という用語は、ある人が特定の接触の最中に取っていると他者が想定するラインによって、その人が自分自身のために効果的に要求する肯定的な社会的価値であると定義されよう。フェースはある人が自分自身にとって体裁が良いことによって、自分の職業あるいは宗教にとって体裁が良い時に、そうゆうものとして、承認された社会的価値の用語で描かれた——他者と共有するものであったとしても——自己のイメージである」(R: 95)。一言で言えば、肯定的な社会的価値として主張された自己イメージである。自己と他者のフェースを保持するように相互行為するというのが、儀礼原理である。逆に言えば、フェースの相互維持が、相互行為の不可欠の要件である。フェースを保持する儀礼行為には、「表敬 (deference)」と「品行 (demeanor)」がある。表敬とは、「ある相手に対して、その相手……の評価が定期的に伝えられる象徴手段として機能する活動の構成要素」である (R: 96)。一口で言えば、他者のフェース、あるいは自己イメージに対する正当な評価を伝える活動である。品行とは「自分の目の前に居る人に対して、自分は一定の望ましい、あるいは望ましくない性質の人間であると表明するのに役立つ、立ち居振る舞い、装い、挙動を通じて典型的なものとして伝えられる個人の儀礼行動の要素」である (R: 77)。要するに自分は真面目で、中庸で、スポーツマンシップを持ち、会話と肉体を統制しており、感情・欲望を自制し、プレッシャーに強い、ちゃんと社会化された訓練された人物であるということ (R: 77)。

「表敬と品行のプラクティスは、個人が存立できる、神聖な自己を投企して、適切な儀礼的基盤に基づいてゲームに留まることができるように、制度化されていなければならぬ」(R: 91)。表敬は「回避儀礼 (avoidance rituals)」と「呈示儀礼 (presentational rituals)」に分類できる (R: 62)。回避儀礼は他者への侵犯の禁止を規定

しているもので、接近を禁止する社会的な距離やプライバシーを考慮する。たとえば、社会階級に違いによってテリトリーの広狭に差がある。呈示儀礼とは他者の取り扱いに期待される表敬が自発的に呈示されることである。一方は言ったりしなかったりしてはならないことであり、他方は言ったりしなかったりしなければならないことであるから、これらの二つの儀礼形式の表敬の間には矛盾と対立がある。相手の個人的な事柄を尋ねることは共感の表現であるけれども、他方、それは相手の私的な領域への侵犯でもある (R: 73)。相互行為の具体的な状況に応じて「適当な緊張関係」が両形式の間に維持されねばならない (R: 76)。

一般に表敬は個人が自分に与えることは許されていない。他者だけが与える権利を持っているのである。品行は個人の属性であるが、これもまた他者が認めるものであって、自分では属性を確立できない。したがって、いずれにしても、他者との関係の中でしか自己イメージは確立できないのである。そこに相互行為の必要性があるということになる。

儀礼秩序はまた相互行為における「関与 (involvement)」(＝「没入」) の配分の側面からも考察できる。⁽⁶¹⁾「関与」とは、「場にかかわる活動」や「状況に適切な行為」に関連して、個人が目下の状況の出来事に対して調和ある注目を払う、あるいは払うことを控える能力のことである。状況への参加者は自分の関与を主要関与と副次関与に配分している。つまり、「ある特定の状況における諸個人の関与配分は、状況内の自己の活動を処理する仕方に関する儀礼規則に従ってパターン化されている。状況には『支配関与』と『従属関与』があり、前者は社会的場で諸個人に義務として課されるものであり、後者は支配関与に注目をはつきりとは払わなくともよい場合に許される関与である」。「関与自体は、諸個人の内面の問題であり、直接には知覚できないが、関与配分に関する情報は、身体イ

ディオム「後述」によつて表現されている。「関与配分の表現に関する儀礼義務・規則は、関与義務とよばれる」。関与義務は、相互行為における主要関与と副次関与、支配関与と従属関与の配分表現行為の適切性を規定している。

(iii) 印象管理の儀礼技法——防護措置と保護措置⁽⁶²⁾ (PS: 208f.) 共在状況において相互行為を行い合う人々は、他の行為者についての既得の情報を活用することは勿論、何らかの情報を得ようとしている。人間の身体は一つの記号体系である。ゴフマンは、「公共的な身体記号」を「身体的イデオム (body idiom)」と呼び、こうした身体イデオムの成立が、諸個人の集合を「社会」と呼ぶ理由の一つであると考ええる。身体イデオムは、慣習化した規範的言説である (B.P. 33-35)。人々はこれらの身体イデオムや服装、立ち居振る舞い、すなわち、その人の「外観」と「マナー」から、その人についての何らかの「印象 (impression)」を受け取り、それに基づいてその人の社会的アイデンティティ・カテゴリーを決めて、その人をどのように扱うかを決めている。各地で起きている地方議員の服装をめぐるトラブルが示しているように、「印象」は社交上の道徳規則に関わるものである (PS: 13)。それは自己情報の自己呈示であるばかりでなく、他者や社会的場をその人がどのように考えているかをも示しているのである。すなわち、これらの、広い意味での「状況の定義」を投合し合っているのである。人々は必要に応じて帯同している各種の「ステレオ・タイプ」をも動員して、相互行為の状況に対応する。

そのような「印象」が真か偽か、リアリティが見せかけかは、他者にとって重大である。しかし、ゴフマンの関心は、印象が真か偽かではなく、「印象管理」の技法にある。個人が「印象」を管理しており、そのために自己呈示しているということになると、他者は印象についてその個人が意図的に制御できる部分と制御できない部分と

を区別して、制御できない部分によって、情報をチェックしようとすることになる。また個人は他者が制御できないと見なす部分の印象をも制御しようと努めることになる。このようにして「情報ゲーム」が行われるのである。

「作業合意」に基づいて維持されている単一の「状況の定義」が、その定義に矛盾する「破壊情報」によって混乱・崩壊する可能性が常にある。相互行為秩序にはこのような破壊情報に対処する装置と技法が備え付けられている。ゴフマンは「個人のパフォーマンスのうちでそのパフォーマンスを観察している人々に対して、一般的で固定した仕方では状況を定義するのに規則的に機能している部分」を「フロント (front)」と呼ぶ。フロントは「個人がパフォーマンスの間に意図的に、あるいは知らず知らずに用いる標準的な種類の表現装置」であって、家具や部屋その他の背景や小道具などの「舞台装置」とパフォーマー自身とわれわれが親密であると同定する「個人フロント (personal front)」——それは「外見」と「マナー」に分けられる——から成り立っている (Ps: 22-24)。これらの舞台装置、外見、マナーの間には何らかの一貫性が期待されている。この期待された一貫性に矛盾する事実は、破壊情報あるいは警告サインとなる。通常は、投企されている単一の状況の定義を維持しながらも、破壊情報とならないように注意深く操作された暗流の情報がある。公認の情報流と内密の情報流の二つがあって、個人はこの二重の情報流を注意深く管理・制御しているのである (Ps: 169)。換言すれば、「役柄を外れないコミュニケーション」と「役柄を外れたコミュニケーション」の二重のコミュニケーションの流れがあるのである (Ps: 166-207)。「役割距離」のところで述べたように、ただ真面目に、真剣に物事に取り組んでいれば良いというわけではなく、多様な相互行為上の要請を満たすためには、このような内密の、役柄を外れた情報流・コミュニケーションが必要なのである。⁽⁸³⁾

相互行為の秩序を維持するために、「印象管理の技法」が絶えず講じられていなければならない。ゴフマンは個人が投企した状況の定義を保護するための方策を「保護措置」、他者が投企した状況の定義を救済するための方策を「防御措置」と呼ぶ（PS: 13, 208-237）。単一の状況の定義を維持するためには、自己と他者が同時に防御措置と保護措置を講じなければならない。ゴフマンは防御措置の技法として、チームを例にして「ドラマツルギー的忠誠心」「ドラマツルギー的規律」「ドラマツルギー的周到さ」について述べ、保護措置の技法の例として表一局域と裏一局域への接近規制と察しについて述べている。そもそも相互行為秩序は脆弱な、破綻する可能性を常に伴ったものであるから、個々の破壊情報によって直ちに崩壊するのではなく、それら対処する措置が働かない場合に破綻するのである。そしてたとえ一度破綻したとしても、相互行為の秩序構造・原理自体は存続する。その意味では脆弱ではあるが、強靱な秩序なのである。

(iv) 会話における儀礼技法——援助交換と補修交換⁶⁴　ゴフマンは会話、たとえば、挨拶と暇ごいという「接近儀礼」の分析において、「援助交換 (supportive interchange)」と「補修交換 (remedial interchange)」について述べている。そのような接近儀礼は最小限二つのムーヴ（たとえば、挨拶—挨拶、質問—答え、提案—受諾／拒絶）によって構成されている。接近儀礼は「時間—人スロット」に編成されており、そのスロットの中で参加者によって行われたことは、他者によってその儀礼の部分として理解されるか否かをチェックされる。そのスロットに見いだせるものは、挨拶として辞書的に同定される会話、慣行的な挨拶に代わるものとして他の辞書的な構成要素を伴った会話、非言語的な代替物、身体的ジェスチャーと姿勢一般である。「隣接ペア (adjacency pair)」として知られる構造を持つが、それぞれの隣接ペアの、出会いを巡る「儀礼カッコ」としての操作の要件は、実際の使用の過程

で違った制約・問題を提示する。援助交換は相互に同じ一組みのムーヴで構成される単純なものだが、補修交換はお互いに構造的に違う複数のムーヴによって構成される複雑なものである。補修交換・作業は——ゴフマンにとって参加者の自己に対する侵犯と等しい——予想された、あるいは行われた相互行為的違反に対する反応として行われる。ゴフマンの初期の分析はフェース・ワークに焦点を合わせている。フェースにとって脅威である違反を考慮から排除する四つのムーヴが挙げられている (IR: 201-23)。違反に注目すること (「挑戦」)、違反者が行為・自身を再定義するか、あるいは脅威にさらされた者を補償したり自己を処罰したりしてその違反を正す機会を与えること (「提供」)、違反者の提供するものを違反された者が追認すること (「受け入れ」)、そして違反者側で自分を許した者に正当な連帯を示すこと (「感謝」)。その後ゴフマンは「弁明 (accounts)」——これには行為者が行為が起きていないこと、あるいは自分は関与していないことを論ずる「反論 (rejoinders)」と行為が間違っただけで概念化されたことを主張する「対抗 (counters)」、無知・責任軽減・能力欠如・自製の欠如を主張する「軽減 (mitigations)」が含まれる——、「弁解 (apologies)」、「要請 (requests)」 (これは事前に侵犯される人の権利を害する行為に従事する許可を要請すること) の三つを付け加えた (RP: 62f, 95f)。

三 〈市民的自己〉の極限——「精神障害」と「アサイラム」

(一) 無礼・不躉・不作法と「精神病的徴候」

公共の場における無礼、つまり、状況における人としての位置の相互承認の不履行（BP: 158）、たとえば、傍若無人の振る舞いや出会いの強要。不躉、つまり、他者のテリトリーを脅かすこと（RP: 28-61, AS: 29）、たとえば、性的好奇の視線。そして不作法、つまり、自己統制の欠如、車中で新聞を読むなどの無難な対人技法（BP: 51）の不行使に対して、〈市民的自己〉の防衛策が講じられる。普通はそれで一応、片付き、収まる。薄井明は言う。

「通常、無礼・不作法は、侵害の意図の有無によって、自己コントロール能力の欠如に起因する一時的あるいは持続的『無能』タイプと、悪意に基づく『意思的』タイプとに大別される（思慮のなさからしてかされた場合でも、補修作業の有無によって、結局そのいずれかに振り分けられていく）。一時的な無能タイプは自発的な補修作業によって資格が保たれる。持続的なタイプ、たとえば、老人・子供は参加者としては認められなくとも「能力を欠きかつ無害」として庇護誘発的な社会的地位に収容される（もつともこの場合には、「一人前の人でない」扱いになる）。一方、意思的なタイプの場合には、一時的・部分的な制裁や資格剥奪の対象となろう。特に、恒常的な相互行為状況においては、重大な結果をもたらすであろう⁽⁶⁵⁾（BP: 217-220）。

しかしながら、特別に扱われる場合がある。それこそがゴフマンのいう「精神病的徴候（psychotic symptoms）」

とされる行動である (R: 139-148)。「精神病はその患者の仕事場、近所、家庭に居る誰かに示される何かであり、初めは少なくとも、これらの場所で行われる、社会秩序の違反行為と見られなければならない。徴候研究のもう一方の側は、公共の秩序の研究、公共・半公共の場所での行動の研究である」。「精神病的行動は示唆されているように、公共の秩序と考えられているもの、特に公共の秩序のある部分、つまり、相互に直接の身体的現前状況にあることによって人々を支配する秩序に違反する。多くの精神病的行動は第一に、フェース・トゥ・フェースの相互行為の行動のために確立されたルール、何らかの評価する、判定する、あるいは管理する集団によって確立された、すなわち、少なくとも執行されるルールを守ることに失敗することである。精神病的行動は、多くの事例においては、状況的な不行跡と呼ばれ得る」。全ての状況的な不行跡が精神病的徴候の事例ではない。しかし、精神病的不行跡にはそれらの共通すると同時に、特有の何かがあるだろうか。文献が示唆するところでは、「精神病的な状況的な不行跡とは、人々が容易には共感できない、人々を導いてその行為者は予測できず信頼するに値しないと感じさせる、その人は人々が居ると同じ世界には居ない、人々はその人の立場に立つて考えられない、そのような行為なのである」。このアプローチは魅力的だが、この考え方はわれわれ民衆の人々の見方の概念装置の一部である。難点は、この概念装置が適用される実際の行動との間に確固とした関係がないことである。

「型にはまったジェスチャーのような不行跡が起きる時に、このことが注目に値するようになり、したがって注目されるのは、何かがコミュニケーショントされているからではなく、他者が現前する場合に人はどのように振る舞うべきかに関するルールが破られているからなのである。言語によるコミュニケーション、そして非言語的なコミュニケーションは、何か別のものを通して通り抜けられる何かなのである。この何か別のものとは、諸個人が自分達の

一緒の往来を規制する義務がある時によるべき、マナー、結びつき、あるいは協同参加の承認されたパターンなのである。精神病的なマナーで行為することは、非常にしばしば、直接の現前状況における、他者と誤って交際することである。「いわゆる精神病的徴候が体系的に位置づけられ、述べられる自然主義的な枠組を多分、提供するのには、これらのルール、その結果としての結合・交際単位、一緒に往来し、離れたままで居ることの——結果として裁可された——様式なのである」。フェース・トゥ・フェースの共在状況における行為ルールに対する違反。これが精神病的徴候の本性的なものであると。

(二) 精神障害者の隔離過程

(i) 精神医は診察している患者の自発的な反応に重きを置いて、この反応に基づいて、その患者の行動がその状況において適切か否かを判定する。軽い違反行為については十分な合意があるわけではないが、このような精神医の診断方法はわれわれの社会の素人のやり方である。この二分法は施設（精神病院、精神福祉保健法など）の在り方にも反映しており、またそのような在り方によって強化されてもいる。「……要求され得るのは、個人が支配的なルール化に酷く侵犯すればする程、その人間の基底にあるパーソナリティは一層深く障害されており、病気は重い……」。「社会状況における行動を支配しているルールに対する付加的な関心は、違反者のもともとの違反行為そのものは無害であると感じられる場合でさえ、その違反者はその状況における自分の立場を暴行・干渉・声かけの目的のために悪用することを差し控えるとは信頼できない——というサインとしてその侵犯行為が見なされるとい

う事実によ来する」。「破られたルールが集まりの組織化にとつて重要である程度に従つて、その程度とその尺度に従つて、その侵犯行為を違反者の自己あるいは存在の深刻な告発として扱ふ必要があるだろう」。「これらのルールを破る人々によつてこれらのルールの上に投げかけられた疑いに對して、……人々は自己防衛の何らかの手段を必要としていよう」。「全てこの世は事もなしという人々の感じにとつて、われわれが自分達の方法では説明できないこの種の悪い行動が、そのように振る舞う人の單なる病気の所為であり、その人が悪く振る舞えば振る舞う程、病氣は重いと科学的な証拠を与えること以上に、心地良いことがあり得ようか」。「われわれは狀況的侵犯者が病氣であると考へることを必要としている。勿論、時には彼らが本當に病氣であると論証され得る。しかしその場合でさえ、このような論証性は、彼らがそうだとわれわれが考へる理由ではないだろう」(以上、BP: 232-235)。

(ii) ゴフマンは「精神障害者の道德的経歴」を「前患者」↓「患者」↓「元患者」の過程として述べている (AS: 125-169)。公共の場所や家庭・近所での行動がそのまま精神医療の順番に繋がるわけではない。身近な人(たとえば、親や配偶者)、苦情申立者(精神病院に繋げた人)、仲介者(警官、医者、牧師、弁護士、教員など)、そして病院管理者が関わつて、問題の人は精神病院・クリニックに連れて來られる。したがつて、精神障害とはまさに、社会的あるいは社会統制的な概念なのである。ここに「前患者」期から「患者」期への第一の臨界点がある。患者はしばしば関わつた人々の裏切りと虚構を感じる。「患者」期の患者は最初は病院に所屬しないことを示すことに腐心する (BP: 224-225)。それは「悪循環」に陥ることがある。たとえば、パラノイア患者が他者の悪意の表出と考へる行動に反撃して、かえつて他者によつて、挑発されていらないのに攻撃したと考へられてしまう。しかし、ある一定の期間の後で「腰を落着けた (settling down)」状態になる。患者は全ては治療のためであると説明さ

れる。自分の過去の行動は全て病気の所為であると説明される。自分は一人前の人ではなく、〈精神障害者〉なのだと思えるように言われる（それを認めないこと、すなわち、〈病識〉がないことは、精神障害の重要に特徴と考えられている）。しかし、この過程、つまり、〈患者〉から〈入院患者 (inpatient)〉への過程に、第二の臨界点が見い出せる (AS: 125-169)。

〈市民的自己〉とは脆弱であるだけに、このように〈精神障害者〉を徹底的に排除して、初めて守られるものなのである。〈儀礼秩序〉とは、一般に礼儀作法とかマナーとかが理解されているような、決して対人関係の潤滑油なのではない。そのことは次のゴフマンの言葉に示されている。「ぎこちなく、またはだらしなくしていること、間違ったことを言ったり、やったりすることは、一人の危険な巨人になること、すなわち、世界の破壊者になることである。全ての精神病患者や喜劇役者が知っているべきであるように、あらゆるまさに不適切な動作というものは、その場のリアリティという薄い袖を突き通すことになるのである」と (EN: 81)。

(三) 「アサイラム」——〈市民的自己〉の剝奪装置⁽⁶⁶⁾

(i) ゴフマンは『アサイラム』に収められた第1論文で全制施設 (total institution) の特徴について、詳細に論じている (AS: 1-124)。ここでは簡潔にまとめた形で述べることにする。

まずゴフマンが最初に強調しているのは、新入りの被收容者が被る「剝奪過程」と「個人の再編過程」である。全制施設で被收容者が受ける仕打ちは、それぞれの施設にとって扱い易い人間にするために、それらの施設に入る

前に持っていた「自己・自己像」を死に至らせて、たとえば、精神病院入院患者という役割だけに押し込めることを目指している（「役割剝奪 (role dispossession)」⁷、「不要部分切捨て (trimming)」ないし「プログラム化 (programming)」⁸）。もっとも、ゴフマンが述べている事例は、それぞれの施設で公認された合目的なものではなく、実際に行われている慣行・実務に過ぎない場合が多い。ゴフマンは貶め (abasements)⁹、降格 (degradations)¹⁰、辱め (humiliations)¹¹、非聖化 (profanations)¹²、より一般的には無力化過程 (mortification process) と呼んでいる。

それはまた〈市民権喪失 (civil death)〉とも言える (AS: 14-18)。入所過程は生活史の聴取・写真撮影・体重測定・指紋採取・番号賦与・身体検査・所持品申告・脱衣・入浴・消毒・理髪・制服貸与・規則説明・部屋割と続く。これらの手続は「入所・入院 (reception)」と呼ばれる普通の手続であるが、特に誰が見ても酷いと思う事態が含まれていなくとも、「剝奪」(ゴフマンは「出離 (a leaving off)」¹³と「再編」(ゴフマンは「受容 (a taking on)」¹⁴と「言う」) なのである。特に決定的なのは、「文字通り裸になる中間点」としての氏名の剝奪↓番号賦与と脱衣↓制服貸与である。以下に述べることは、この過程の具体的な諸点ということになる。

サイクスは拘禁の苦痛として五つの剝奪について詳細に述べている。¹⁵①自由の剝奪。行動の自由の喪失だけではなく、社会関係と社会的役割の喪失と、それらと深く関わる「市民としての権利」、道徳的な人間としての地位の喪失を意味する。②物品と便宜の剝奪。ミニマムの衣食住は「与えられているが」、自分の選択によるものではない。資本主義社会での貧乏人の地位に置かれる。③異性関係の剝奪。性的欲求の不充足というだけではなく、「男」としての地位に不安を持つようになる。同性愛関係によるダメージもある。④自主性の剝奪。自分ではほとんど何も決定できない。一人前の人間としての自我像を決定的に破壊する。⑤安心感の剝奪。自分が選んだのではない他

者との強制的な共存。プライヴァシーの剝奪。常に試されている不安。ゴフマンは〈市民的自己〉に対する侵犯という観点で述べている。その意味でサイクスの分析と重なるところが多いが、視点が異なると言えよう。ゴフマンの纏め方はやや列挙的であるので、薄井の整理に従って三つの側面から見ることにする。⁽⁶⁸⁾三つの側面は相互に密接に絡み合っているが、一応は分けて考えることができよう。

第一に、「人」としての立場の持続的な否認。前述したように、一人前の人格を持った、一人の独自の「人」を否認して、氏名を奪い、単なる受刑者〇〇番にすることが、最初から意図的に目論まれているのである。その上、「強制的表敬」制度と職員や他の被收容者による無礼・不作法な扱い（AS: 22-23）、屈辱的な姿勢・動作、無意味な仕事、不潔な風呂・便器・部屋、粗末な食事。自分のアイデンティティを守る衣類・道具・化粧品など（identity equipment or kit）は全て取り上げられる（AS: 21）。さらに、〈市民的自己〉を守るために行使用するフェース・ワークはほとんど認められない。不機嫌な態度や不服そうな態度は許されない（AS: 36, 43）。日常生活の儀礼秩序に違反する人は、「危険な巨人」、「世界の破壊者」であるから、被收容者の〈市民的自己〉が受けるダメージは計り知れないものがある。

第二に、自己のテリトリイの侵犯。われわれは自分の身体を中心として一定の不可侵のテリトリイを持つ。たとえば、投石が体に当たらなくとも暴行罪になるのは、それがその人の身体的テリトリイの侵犯だからである。特に被收容者の場合には、私秘的領域に至るまで侵犯される。肛門や性器を含む身体検査や一方的な監視（AS: 24-25, 28）。私秘的情報（「情報の聖域（informational preserve）」）（AS: 23-24）こそが施設にとっては重大であると考えられている。相部屋や一緒の検査・入浴など、強制された対人関係による侵犯。他の被收容者に対する

酷い処置への参加を強制的されること (AS: 24, 28-33)。身体的にも精神的にも自己の「神聖な」テリトリーは侵犯され続ける。

第三に、自己コントロールの喪失。「市民社会においては、個人が成人になる時には、大抵の活動の遂行に対する社会的に受け入れられる基準を自分のものにしていく。したがって、個人の行動の当否の問題は、たとえば、その人の生産性が判定される場合のように、一定の点についてだけ生ずる。それ以外の場合には、個人は自分独自のペースで行くことが許されている。彼は常に振り向いて、批判あるいはその他の制裁が行われはしないかと気にする必要はない。加えて、多くの行動は個人の好みの問題と定義され、一定範囲の可能性からの選択が特に許されている。多くの活動に関して権威の判断と行動は停止されており、人は自分自身の権威によっていく」(AS: 37-38)。個人は一般社会では、多くの事柄を自分で自由に決定できる。しかし、全制施設では、短時間で一度に多くの人々を扱わねばならないこと、階層制組織であることから、細かいところまでも規則で決められている (AS: 38-44)。「観客分離」がなく (P.S: 49)、「局域分離」(P.S: 106) もない全制施設では、フェイス・ワークのための手段はほとんど有効でない。

しかし、後述するように、ゴフマンが述べる精神病院では、若干の事項・場所で第一から第三の剝奪・喪失に対する対応が可能であった。

(ii) ゴフマンは『アサイラム』の第4論文「医療モデルと精神障害者の病院収容」において、「医療のサーヴィス・モデル」を施設の精神医学に適用することには問題があることを論証する。「医療のサーヴィス・モデル」とは、依頼人である患者が自分の身体を医療サーヴィス提供者に委ね、医療サーヴィス提供者はその依頼人Ⅱ患者の

ためにサーヴィスを提供するということである。この定義の時点で既に幾つかの問題がある。①患者が自分の身体をサーヴィス提供者に委ねると言っても、完全にまかせるわけではなく、サーヴィス提供者の方でも、たとえば、不治や末期の患者の場合のように、引き受けることにも限度がある。②患者が別の仕事をしている間は、患者の身体は例外を除けば、ほとんど問題にされない。③医療サーヴィスは治療の確立が低い。この点をカヴァーする実務が発達している。④環境自体が病因である場合には、サーヴィス・モデルは十分には適用されない。⑤患者の保護者の立場、医療サーヴィス提供者の立場は患者自身の立場とは違う。この点でもサーヴィス・モデルは破綻する。⑥大病院などでは、患者自身がサーヴィス提供者を選択できない仕組みであることが多い。⑦病院は患者の治療のためにだけ運営されるわけではない。病院のルーティーンは医療上の考慮というよりは、職員にとって都合が良く、気骨を折らずに済むように患者管理上の因子に支配されている。病院という所は、患者の心を傷つける環境なのである。⑧しかしながら、これらの難点にも拘わらず、たとえば、骨折の後、食事療法、安静の必要など病院内の環境の調整は、患者にとって必要なのである。⑨患者は「医療のサーヴィス・モデル」の不都合にも拘わらず、「医師の要求の妥当性を立証し、これによって医療モデルの妥当性を裏づけ、自発的に医師に従って不調……をものように非人称的に——誰の願いでも、誰の意志でも、また誰の過誤でもない」と見るのだ。入院は一時的に個人を様々の社会的役割から遠ざける。しかしこの試練を乗り越えれば通常の場合、一度離れた社会的場所、すなわち「病気による不在」……の制度——この制度があればこそ他人は彼の「役割」放棄の重大性を不問に付すのだ——ゆえに彼のために空けておかれ確保しておかれる場所に復帰することができるのである」と（AS: 340—348）。

「医療のサーヴィス・モデル」を施設の精神医学に適用するには、一層根本的な多くの問題がある（AS:

350-377)。①精神病院というものは、患者や精神科医や職員のために存在しているのではなく、地域社会を様々な形の異常な言動による危険と迷惑から保護するために存在しているという一面がある。この面ではサーヴィス・モデルではなく、支配者と被支配者、役人とその支配を受ける者という関係になる。②精神病院は療養所・一般病院・刑務所・養老院・孤児院などの施設網の一つとして歴史的にも現在も位置づけられる。③精神病院への入院は患者が低年齢者・高年齢者でなくとも、自分自身の同意に基づく場合は少なく、他の病気による入院と違って、入院はステイグマを伴う。④精神医学の技法は精神科医だけに専有されているのではなく、看護師達も患者との接触時間が長いことから、不断に影響を与えている。しかし、精神科医の権限は広く、入院患者の全ての権利・義務の与奪を決定する立場にある。内科などの治療も可能であれば行う。⑤一般病院は内域と外域に分割されている。内域とは、医療的に指定された統制の諸条件の下にある生活体の傷害を受けた部分のことであり、外域とは内域を容れる場所のことである。精神病院の場合には、たとえば、自殺企図がある時には、患者の一日の生活全体が内域であり、重症病棟の条件は患者の生体の諸能力（人格編成）に合わされると主張される。しかし、器質性障害——たとえば、癲癇——の場合であれ、重症病棟の場合であれ、診断は医学的であっても、処遇はそうではない。患者の生活の仕方がどの程度（正常△正常▽）でありうるかについての合意はないから、精神障害者一般に可能な生活をさせるほかはないのである。⑥精神病院は治療効果が出現する場所としては条件が十分には整っていない。職員はもっぱら患者の不服従行動を記録しているが、施設の壁が厚い歪んだプリズムのように働いて、言動の屈折が生ずる。たとえば、家族の一員に対する不穏当な言動は院内では生じないし、院内の不本意な状況に対する反応が古い反応を覆い隠す。治療に関しては一層の困難があり、患者を院内で適応させることが、院外（世界）での適応より

も優先する。一連の治療が全患者に一律に施されたり、少数スタッフによる多数患者の管理のための懲罰システムが患者管理の中心となる。⑦サーヴィスという準拠枠をそっくり適用することがそもそも問題なのである。すなわち、障害が存在している単位は、他の単位から図と地のように孤立して存在しているわけではない。患者の対人的相互関係全体が、患者の現在の苦しみと不可分なのである。また△病理▽という概念も問題である。特定の行動が不適切か否かは、整然とした見取り図を持たない。それらは文化あるいは下位文化によって色々である。それはその精神科医の視点で判断される政治的な判定に過ぎない。⑧患者の立場からすると、患者自身の行動はサーヴィスの対象とされることはあっても、患者自身がサーヴィスに参加する資格は認められないことになる。その意味で法が要請しているにも拘らず、精神医学が倫理的中立性を保持し続けることは、至難のわざなのである。それは患者自身に様々な過誤をつきつけ、生き方の誤りを納得させることを仕事としている。「一人前の人間を脅したり説教する」という特異な職業上の仕事は、精神科のスタッフが警察官と共有しているものである」と。⑨施設勤務の精神科医と患者との関係には、精神障害者の病院収容が必然的かつ本来的に伴っている難しい問題がある。精神科医は専門的サーヴィスを提供するという姿勢を取ることには徹している。患者は症状を穏当な言葉で陳述しなければならぬし、それを自責的に承認し、自分を変えたいと真剣に表明しなければならぬ。しかし、患者が自分の置かれた立場をこのように見ることはほとんどない。患者ははつきりした多くの理由で、自分の置かれた立場に不満を持っており、精神科医を権力者と見て、闘うべき存在と感じがちである。精神科医はこのような不平を当然の感情の表現としてではなく、病気そのものの徴候として取り扱うように圧力を受ける。これは患者の参加権を否定することである。このような両者が一つところに居るであるから、この関係は、継続的なサーヴィスの授受の相互行為

ではあり得ない。一種の奇妙さを制度化しているのである。⑩精神病院には独自の「危険委任 (danger mandate)」が存在し、間違った措置は患者を危険に陥れる可能性があるから (精神病の悪化、回復不能の退行など)、潜在的に危険な措置は精神科医だけが行わなければならない。〈素人療法〉、いわんや〈精神分析〉はしてはならないとされている。しかし、このような考え方は精神科医の立場を裏書してくれるけれども、実は、言語的な行為を含めて、患者は毎日、精神的外傷を受けるような、ほとんど無制約に苛酷な経験をしているのである。⑪状況の二つの局面、すなわち、病気が健康かという局面と入院か退院かという局面は関連しているとされている。入院していること、あるいは退院できないことは、患者が精神的に病んでいることの自明の証拠とされている。そこにこそ、精神病院の存在理由があるからである。病院自体が患者に安心感を与え、種々の日常的責任から解放するとされている。⑫病気が悪化する方向への変化は退行、回復する方向への変化は自然寛解と称される。職員が使う、これらの言葉の威力を借りて、病気を医学的に扱うことができる。病院管理上の諸事実と病棟システムのダイナミックスも、精神医学的サーヴィスの用語で表現される。精神科医、看護婦・看護士という呼称そのもの、薬物療法・作業療法、慢性患者病棟あるいは継続治療病棟、回復期病棟、治療による退院、寛解による退院などの用語は、いずれも医療モデルによっている。懲戒措置についても医療的措置の用語で説明されていることが多い。⑬施設に多くの職員が居ることは、他の職員が患者に乱暴を働くことを阻止する役割を果たしている。医療モデルは医師その他のスタッフが精神病院という社会から隔絶した環境で働く理由である。患者も医療モデルに支えを見いだしている場合がある。「このような翻訳を行うためには、裁判官、指導員、そしてわれわれのその他の強制施設の職員がしているように、リアリティを相当程度、歪めなければならない。罰に合う罪が見い出されねばならず、そして被収容

者の性格はその罪に合うように再構成されねばならない。「他人への服従と人の独自の個人的適応の体系的な混同が、「精神病院によって」支持されている」。「被收容者と下級職員達は広範な支援行動——手の込んだ劇に仕上げられた献ぎ義務——に巻き込まれており、ここでは医療類似のサーヴィスが進行中であり、それを提供しているのは精神科のスタッフであるということを裏づける、目論んだわけではないにしても、効果を挙げている。この主張の弱点については、この主張を支えるのに必要な根拠が示唆している」。「精神病院の患者は自分がある特殊な拘束状態に置かれていることを認めるはずである。病院から逃れるため、あるいは病院での生活を楽にするためには、自分に与えられた場所を受け入れていることを示さなければならないし、彼らに与えられている場所とは、このような取引を押し付けるように見える人々の職業的な役割を支持することなのである。このような自己疎外的な精神的隷属状態——それは多分、若干の患者が精神的混乱状態になることを説明するのに役立つ——は、専門的サーヴィス関係、特にその医療版の偉大な伝統に訴えることによつて惹き起こされている。精神病院の患者達は、残りのわれわれの生活を容易にしているサーヴィスという理念の重みによつて押し潰されそうな自分自身を見出すことができよう」と (AS: 384-386)。

(iii) ゴフマンは『アサイラム』の第3論文「ある公共施設の裏面生活——精神病院における苦境の切り抜け方の研究」において、ある精神病院の裏面生活について詳細に述べている (AS: 171-320)。前述した〈市民的自己〉の剝奪・喪失の三つの側面のそれぞれについて、ゴフマンは「第一次的調整 (secondary adjustment)」の豊富な事例を挙げている。「第一次的調整とは、ある組織のメンバーが非公認の手段を用いるか、あるいは非公認の目的を達するか、あるいは双方を同時にするかして、彼のなすべきこと、得るべきもの、それ故に彼のあるべき姿に関

する組織の想定「これを認めることが第一次調整である——筆者」を回避するところの、ある慣行的仕組みである、と定義されよう」(AS: 189)。第二次調整には個人的な適応、経済的な交換、社会構造的な交換の三つの種類がある。〈市民的自己〉の剥奪の第一の側面、〈人〉としての立場・地位の持続的否認に対しては、たとえば、看護師その他のスタッフが特定の患者を自分の仕事のために使う時に、本来なら与える必要のない便宜を感謝のために与える例が挙げられている。これは個人的なものではなく、社会構造的なものである (AS: 287-294)。第二の側面、自己テリトリーの侵犯に対しては、病院内のいろいろな場所が患者達や患者と職員、患者と訪問者の非公認の交流のために利用され、病院側も黙認していることが、豊富な事例で語られている (AS: 227-248)。第三の側面、自己コントロールの喪失についても、個人的適応、経済的な交換、そして社会構造的な交換のそれぞれの形態で、切り抜け策が取られている (AS: passim)。

強制収容所のように被収容者の人格的崩壊をもたらす場所からの正気の生還は困難であるが、ジョン・アーウィンが述べるように、〈嫌々ながらのお客〉の対する刑務所の効果は限られている。その意味では人間は強靱なものだ(69)と思う。人はなかなか変えられないものであるということ、良いことなのである。簡単に変えられるようでは、大変なのである。このように考えて来ると、問題はゴフマンも指摘し、オウム事件でわれわれが体験したように、自ら進んで全制施設に身を任せる人々なのかもしれない。(70)

(1) 小野坂「日々の生活世界における経験の構造」『法政理論二九巻二号二六一四七、七五—七七頁で、『フレーム分析』に基づいてゴフマンの検討を行った。

- (2) Dennis Brissett and Charles Edgley, "The Dramaturgical Perspective", in: D. Brissett and Ch. Edgley (ed.), *Life as Theater: A Dramaturgical Source Book*, 1990, 2. ed., pp. 1-14. 著者名がなら引用は、本書の引用である。
- (3) R. S. Perinbanayagam, *Signifying Acts: Structure and Meaning in Everyday Life*, 1985, p. 26.
- (4) Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life*, 1959, p. 2. トンマン（石黒毅訳）『行為と演技——日常生活における自己提示』、昭和五十一年、三頁。
- (5) G. Ziaklin, cited in: D. Brissett and Ch. Edgley, op. cit., p. 5.
- (6) Erving Goffman, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, 1967, p. 45.
- (7) A. Paul Hare and Herbert H. Blumberg (ed.), *Dramaturgical Analysis of Social Interaction*, 1988 の構成に基づく。著者名のない頁数だけの引用は本書。
- (8) 参照、ホール・リクール（久米博訳）『時間と物語』I第二章。
- (9) Hare and Blumberg, op. cit., pp. 15-16.
- (10) ノースロップ・フライ（海老根宏／中村健二／出淵博／山内久明訳）『批評の解剖』、一九八〇年、五一—七五、四〇〇—四一六頁は悲劇、喜劇、ロマンス、アイロニーの四様式について論じている。前二者は世界についての対照的な見方を反映しており、後二者は物語の語り方の様式を反映している。Robin West, "Jurisprudence as Narrative: An Aesthetic Analysis of Modern Legal Theory", in: do, *Narrative, Authority & Law*, 1993, chapter 8. 自然法論者と実証主義者の法の分析方法はそれぞれフライのロマンス主義とアイロニー主義の語り方に、自由主義と国家主義の法の見方はフライの喜劇的と悲劇的な見方に重ね合わせる事ができること論証しようとする。
- (11) 帰属理論については Winfried Hassemer, *Einführung in die Grundlagen des Strafrechts*, 2. Aufl., 1990, SS. 219-222.

ハッセマーは言う。われわれの文化においては道徳的判断は深く「文化に」根差している。自己や他者についての帰責の日常体験は既に子供時代に始まる。法の歴史に見られる主観的帰責の発展段階は、人間個人の発達史においても繰り返される。おおよそ7歳を過ぎると、子供は主観的な帰責をし始める。帰属理論においても、実証的なデータによって、主観的帰責が単に深く根差した、早期に社会化されたものであるばかりでなく、それはまた特に日常生活における社会的行動の、高度に差異化されて活用される手段でもあることが分かっている。「行為者は行為の結果に対して責任があるか」という問いに対する答えには、因果性 (association)「結果責任 (commission)」、過失責任 (forseeability)「故意責任 (intentionality)」、責任阻去 (justification) の五段階を区別する (Günter Bierbrauer/Berhard Hatfke, "Schuld und Schuldunfähigkeit", in: Hassemer/Klaus Lüderssen (Hrsg.), Sozialwissenschaften im Studium des Rechts, Bd. III, 1978, Ss. 120-186) を用いる。刑法の物語は文化における交差するものである。

- (17) Georges Polti (translated by Lucille Ray) 'The Thirty-Six Dramatic Situations, 1977. 三十六の状況について pp. 13-118' 結論は pp. 119-132. めいごもスリーオ『20万の演劇状況』もある。
- (18) A. Paul Hare, *Social Interaction as Drama: Applications from Conflict Resolution*, 1985, pp. 167-170.
- (19) Rom Harré and P. F. Second, *The Explanation of Social Behaviour*, 1972, pp. 147-153, 176-204 and pp. 205-206.
- (20) Thomas F. Van Laan, *The Idea of Drama*, 1970, p. 229, cited in: Hare and Blumberg (ed.), op. cit., p. 20.
- (21) Rom Harré, *Social Being*, 2 ed., 1993, pp. 146-161 設定(トピック) 場面 (setting) の時間的・空間的分析を行っている。
- (22) A. Paul Hare, "A dramaturgical analysis of street demonstrations: Washington D.C., 1971 and Cape Town, 1976", *Group Psychotherapy, Psychodrama and Sociometry*, vol. 33, pp. 92-120, cited in: Hare and Blumberg (ed.), op. cit., pp. 21-22.

- もてと長き期間の推移たつたは「自然史 (natural history)」として論じられることになる。参照「J・I・キッセ／M・B・スペクター（村上直之／中河伸俊／鮎川潤／森俊太訳）『社会問題の構築』、一九九〇年。Peter Conrad/Joseph W. Schneider, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*, 1980.
- (8) Peter Marsh, Elizabeth Rosser, and Rom Harré, *The Rules of Disorder*, 1978, pp. 84-90.
- (9) Nelson N. Foote, "Concept and Method in the Study of Human Development", in: Brissett and Edgley (ed.), *op. cit.*, pp. 63-72.
- (20) Erving Goffman, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, 1986, pp. 129-130.
- (21) Elizabeth Burns, *Theatricality: A Study of Convention in the Theatre and Social Life*, 1972, pp. 136-137, cited in: Hare and Blumberg (ed.), *op. cit.*, p. 48.
- (22) Erving Goffman, *The Presentation of Self*, p. 79, 81. 邦訳『行勢と演技』、九三、九五頁。
- (23) G・H・ミーン（稲葉三千男／滝沢正樹／中野収訳）『精神・自我・社会』、一九七三年、九八、二六九、二七六頁。
- (24) Theodore Sarbin and Vernon Allen, "Role theory", in: G. Lindzey and E. Aronson (ed.), *Handbook of Social Psychology*, vol. 1 (2. ed.), p. 534.
- (25) Erving Goffman, *Frame Analysis*, pp. 125-127.
- (26) Erving Goffman, *Frame Analysis*, pp. 138-144.
- (27) A. Paul Hare, *Social Interaction as Drama: Applications from Conflict Resolution*, 1985, p. 55.
- (28) A. Paul Hare, *Social Interaction as Drama*, 1985, p. 17.
- (29) A. Paul Hare, *Social Interaction as Drama*, 1985, pp. 18-19.

- (30) エリック・バーン (南博訳) 『人生ゲーム入門——人間関係の心理学』、一九六七年。Claude Steiner, *Scripts People Live: Transactional Analysis of Life Scripts*, 2nd ed., 1990.
- (31) Stanford M. Lyman and Marvin B. Scott, *A Sociology of the Absurd*, 1970, p. 5.
- (32) Catherine Cobb Morocco, "The development and function of group metaphor", *Journal for the Theory of Social Behaviour*, vol. 9 (1), pp. 15-27, cited in: Hare and Blumberg (ed.), op. cit., pp. 59-60.
- (33) Larry Cochran, *Portrait and Story: Dramaturgical Approach to the Study of Persons*, 1986, p. 5.
- (34) Victor Turner, *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, 1974, pp. 38-45.
- (35) Robert P. Abelson, "Psychological status of the script concept", *American Psychologist*, vol. 36 (7), pp. 715-729. Jean Matter Mandler, *Stories, Scripts, and Scenes: Aspects of Schema Theory*, 1984. 私は前にスク립トについて論じた。小野坂「日々の生活世界における経験の構造(Ⅰ)」法政理論一九卷二号二二—二六頁。
- (36) Goffman, 1977 (M. J. Deegan との個人的通信による), cited in: Hare and Blumberg (ed.), op. cit., p. 63.
- (37) ビーター・バーガー／トーマス・ルックマン (山口節郎訳) 『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』、一九七七年、二二八頁(訳文は翻訳に従っていなさう)。
- (38) Stanford M. Lyman and Marvin B. Scott, *The Drama of Social Reality*, 1975, pp. 103-104.
- (39) ケネス・バーク (森常治訳) 『動機の文法』、一九八二年、三三三頁。バーク (J・R・ガスフィールド編、森常治訳) 『象徴へ社会』、一九九四年、二二七頁。
- (40) Erving Goffman, *Frame Analysis*, 1974. 小野坂・法政理論一九卷二号二六—四七頁。
- (41) D. Brissett and Ch. Edgley (ed.), op. cit., pp. 347-352.

- (42) A. P. Hare and H. H. Blumberg (ed.), op. cit., pp. 72-74.
- (43) Th. Sarbin and V. Allen, "Role theory", in: G. Linzey and E. Aronson (ed.), op. cit., pp. 488-567.
- (44) (46) Sheldon Stryker, "Symbolic interactionism: Themes and variations", in: M. Rosenberg and R. H. Turner (ed.), *Social Psychology: Sociological Perspective*, 1981, pp. 3-29.
- (45) Sarbin, in: Vernon L. Allen and Karl E. Scheibe (ed.), *The Social Context of Conduct: Psychological Writings of Theodore Sarbin*, 1982, p. 52, cited in: Hare and Blumberg (ed.), op. cit., p. 81.
- (47) Ralf Turner, "Role Taking: Process versus Conformity", in: Brissett and Edgley (ed.), op. cit., pp. 85-100.
- (48) Erving Goffman, "Role Distance", in: Brissett and Edgley, op. cit., p. 101, 107. トロブマン（佐藤毅／折橋徹彦訳）『出来さ——相互行為の社会学』一九八五年 一一五—一二四—一二五—一二七頁。
- (49) A. P. Hare and H. H. Blumberg (ed.), op. cit., p. 87.
- (50) Ralf Turner, "Role Taking", op. cit., pp. 97-98.
- (51) Sarbin, "Role transition as social drama", in: V. L. Allen and E. van Vliert (ed.), *NATO Conference on Role Transitions*, 1984, pp. 21-37, cited in: Hare and Blumberg (ed.), op. cit., pp. 87-88.
- (52) Lewis Yablonsky, "An operational theory of roles", *Sociometry*, vol. 16 (4), pp. 349-354. Hare and Blumberg (ed.), op. cit., pp. 84-87.
- (53) Victor Turner, *Drama, Fields, and Metaphors*, 1974, p. 50.
- (54) ここでは引用するブーサイニング・トロブマンの著作を挙げる。略号と頁数を田中たか子。PS: *The Presentation of Self in Everyday Life*, 1959, EN: *Encounters*, 1961, AS: *Asylums*, 1961, ST: *Stigma*, 1963, BP: *Behavior in Public Places*, 1963, IR:

- Interaction Ritual, 1967. RP: Relations in Public, 1971. FA: Frame Analysis, 1974. FT: Forms of Talk, 1981. 1983b: "The Interactional Order: American Sociological Association, 1982 Presidential Address", *American Sociological Review*, vol. 48 (1), pp. 1-17.
- (55) それは換言すれば、「眠りはあまりに深い」(ゴフマン)、「ブラクティスの眠り」(安川)である。相互行為秩序の脆弱性を一面的に強調するのは疑問である。
- (56) 安川一「 \wedge 共在 \vee の解剖学——相互行為の経験構造」・安川一編『ゴフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』、一九九一年、一四—一六頁。
- (57) 安川・前掲論文五—六頁。
- (58) Harvey Sacks, "On doing (being ordinary)", in: J. Maxwell and J. Heritage (ed.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 1984, pp. 413-429. 小野坂・法政理論二九卷二号三—五頁。
- (59) 小野坂・法政理論二八卷四号四八—四九、五九—六二頁。Arnold Gehlen, *Der Mensch*, 7. Aufl., 1962. ゲーレン(平野具男訳)『人間』、一九八五年。ゲーレン(亀井裕/滝浦静雄他訳)『人間学の探求』、一九七〇年。
- (60) 椎野信雄「ドラマツルギーから相互行為秩序へ」・安川編・前掲書、五一—五二頁。
- (61) 椎野・前掲論文、五三—五四頁。安川・前掲論文、二八頁の注(14)は言う。「……『コミットメント』で共在内的位置による特定行為への拘束もしくは責務を指し、『愛着』である位置と行為への情緒的移入を指す。両者を包含する概念が関与とっていいだろう」と。
- (62) 椎野・前掲論文、四—四九頁参照。
- (63) 二つの副次トラック、「隠蔽トラック」と「重複トラック」(FA: 215f) など。

- (64) Robin Williams, "Goffman's Sociology of Talk", in: Jason Ditton (ed.), *The View from Goffman*, 1980, pp. 210-232, esp. pp. 223f. cf. Emmanuel A. Schegloff, "Goffman and the Analysis of Conversation", in: Paul Drew and Anthony Wootton (ed.), *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, 1988, pp. 89-135. マンデスロットとライマンの論文を引用しよう。スロットとライマンはライト・ミルズの古典的な定式に従って、人間が社会関係を構築・維持・補修するために言語的技法を使うやり方を検討する。「弁明 (excuses)」は行為者が問題行為が悪いことを認めながらも、そのための完全な責任を否定する「説明」であり、「正当化 (justification)」は行為者が責任を認めながら、その否定的な質を否定する「説明」である (Marvin B. Scott and Stanford Lyman, "Accounts", in: Brissett and Edgley (ed.), op. cit., pp. 219-242.)。
- (65) 薄井明「〈市民的自己〉をめぐる攻防——ゴフマンの無礼・不作法論の展開」・安川編・前掲書一七〇頁。
- (66) 小野坂「刑務所文化と『刑務所化』——刑務所の社会学的検討」刑法雑誌一九卷一一二号、一九七三年、四五—七五頁と小野坂「刑務所社会学の再検討」『刑事政策の現代的課題（小川太郎博士古稀祝賀）』、昭和五二年、三四三—三六四頁を参照されたい。「total institution」を「全体施設」と訳している。「全制施設」に訂正する。
- (67) サイクス（長谷川永／岩井敬介訳）『囚人社会』、一九六四年、一〇七—一二七頁。サイクスは受刑者の集団的適応に重点を置くのに対して、ゴフマンは個人的適応に重点を置く (AS: 60-66)。
- (68) 薄井・前掲論文、一七五—一七六頁。ただし、各側面への整理の仕方は私自身のものである。後述するように、ゴフマンは別の論文で、被收容者達のしたたかな対応・方策を詳述する。薄井の叙述はこの点に触れていない。
- (69) 小野坂・『刑事政策の現代的課題』所収論文、参照。
- (70) 「それが観想的生活の意味であり、観想的修道院における生活のルーティーンを構成することになっている、一切の一无意味な細かい規則・典札・断食・服務・告解・服従・労働の意味なのである。すなわち、それらは全て、われわれが

何者であり、神とは何なのかをわれわれに想起させ、われわれ自身の姿のおぞましさを覚えさせて神に向かわせるのである。かくしてついに、われわれ自身の内に、つまり、神の広大な善と無限の愛の鏡となったわれわれの自身の浄化された本性の内に、「われわれは神を見い出すであらう……」(Thomas Merton, *The Seven Storey Mountain*, 1948, p. 372, cited in: AS, 46)。オサムについては短いものであるが、小野坂「日本における国内のテロリズム事件とその対応」法政理論三二巻三号参照。